

# ドイツ啓蒙主義歴史学研究（Ⅰ－２）

——「年代学論争」と Johann Christoph Gatterer ——

岡崎 勝 世

## 目 次

- 一、はじめに
- 二、「普遍史」と「年代学論争」
  - 1. 「普遍史」の構造
  - 2. 『聖書』批判の展開と年代学論争
  - 3. 「普遍史」の構造と年代学論争
  - 4. 年代学論争
- 三、「年代学論争」とガッテラー
- 四、小結

### 一、はじめに

さきに筆者は、ガッテラーの世界史の構想に注目しながら彼がその生涯において四種類の世界史叙述を試みたことを紹介し、そしてそれらの叙述を全体として中世的・キリスト教的「普遍史」から近代的・科学的「世界史」への転換点として位置付けた。<sup>①</sup>しかしそこではまだ多くの細部にわたって論ずべき問題が残されている。本稿はそうした諸問題のうち、16世紀から18世紀にかけて行われた「年代学論争」の問題と、そこでのガッテラーの位置を考察することを目的としている。この問題については既に前川貞次郎氏の優れた論考があり、<sup>②</sup>本稿も多くこれによっているが、筆者なりに新たな資料なども紹介しながら考察を進めたい。

本題にはいる前にここではその前提として、まず西欧世界における紀年法について簡単にまとめておこう。<sup>③</sup>

西ローマが滅んだ後、世俗の文書で使用された紀年法には三種類があった。一つは「インディク

チオン」による紀年法である。これはコンスタンティヌス帝が収税のために定めたもので、313年を紀元とし、15年の周期を持つ紀年法である。第二はローマ時代から使用されていた「コンスル紀年法」である。コンスルは4世紀になると選出が不規則になり始め、そのため「コンスル後」という年号が発生した。さらに西ローマでは534年のパウリヌスを最後に選出されなくなり、同様に東ローマでも541年のバシリウスを最後に選出が途絶えると、以後は東西でそれぞれ「コンスル・バシリウス後」、「コンスル・パウリヌス後」で年号をしるしていった。第三は皇帝在位年による紀年法で、東ローマではユスティニアヌス帝がこれを始めた。帝は、また、上記三種の年号を併記することを開始した。この三つの年号を併記する習慣は西欧でも帝に征服された地域からひろまり、王位在位年についてのみは独自の年号を使用する形で、ランゴバルト、メロヴィング朝でも使用されていった。

一方、キリスト教会ではローマ滅亡後も284年を紀元とするディオクレティアヌス紀元が使用されていたが、525年、ディオニシウス・エクシギウ

スが今日使用されている「キリスト紀元」を創始した。<sup>④</sup>「われわれの長い年月を数えるとき、不信心な迫害者の名前と結びつけることを従来望まなかったから、むしろわれわれの主イエス・クリストの体現から年を数える方法を選んだ」<sup>⑤</sup>というのがその理由であった。ただし、このディオニシウスのキリスト紀元はただちには広まらなかった。これを広めたのはイギリス人の功績に属する<sup>⑥</sup> イギリスでは664年、ホイットビーの宗教会議でディオニシウスの復活祭表を用いることに統一された。イギリスの先例ととりわけベーダの著作の影響により、8世紀にはこれをキリスト教年代学者、年代記記者たちが広く使用し始めた。次いでカール大帝がこれを世俗文書にも取り入れた。帝がランゴバルトに関する勅令で、「われわれの主イエスの生誕から801年、インディクティオン9年、われわれのフランクにおける統治から33年、イタリア統治から18年、しかしてわがコンスル在位第1年」<sup>⑦</sup>という年号を使用したからである。この結果、9世紀以後、次第にイベリア半島を除く<sup>⑧</sup>全ヨーロッパで、世俗、教会文書にキリスト紀元を使用することが一般的になったのである。

上述のキリスト紀元には「キリスト前」という発想はなかった。その理由は、もともと「紀元」は「始まり」の意味であるという、言葉の意味そのものにも由来する。しかしまた「キリスト前」という年号そのものが不必要だったということにも由来している。それは元来キリスト紀元自体がより大規模な紀年法の、即ち、「創世紀元（世界年代）」と呼ばれ、天地創造から最後の審判までの時間的枠組を持つ紀年法の一部として出発したという事情があるからである。この創世紀元は旧約『聖書』、特に「モーセ五書」によって年代を算定するものであるから、決してキリスト教徒だけのものではない。むしろ、既にヨセフス、ヨセ・ベン・ハラスタなど、1世紀から2世紀のユダヤ人たちによっ

て開始されていた。<sup>⑨</sup> ことにヨセフスは『ユダヤ古誌』（93/4）をギリシア語で著し、ユダヤ人の宗教が最も古く、またその神の摂理がローマ世界をも貫いていることを示そうとした。<sup>⑩</sup> そこでは人類の天地創造以後の歩みが世界年代を用いて叙述されている。「キリスト教年代学の父」ユリウス・アフリカヌスが『年代誌』（212～221）を著したのも、キリスト教徒の立場から、同様にキリスト教徒の神の摂理がローマ世界をも包み込んでいることを、ローマ世界に対して説明するためであった。彼はイエス生誕を創世紀元5500年とし、またオリンピックアード紀元も併用してこれを創世紀元の内に収めることで、ギリシア人、ローマ人の歴史もキリスト教的世界史記述の枠内に組みこんでいる。ユリウス・アフリカヌスによって成立したキリスト教年代学は、「教会史の祖」エウセビオスと、4世紀末に彼の著書をラテン語訳し、これに「年表」を追加したヒエロニムスとによって受け継がれた。彼らはイエス生誕を5199年と算定した。<sup>⑪</sup> さらに各民族の伝える巨人や大洪水の伝説を『聖書』のネピリム、ノアの洪水に結びつけ、これをノアの家族8名からの人類の再出発の物語とうまく接合させた。そしてこれを通じ『聖書』に基づきながら、歴史的世界を越えて伝説の世界すら包摂する一貫した世界史の叙述を与えた。<sup>⑫</sup> ハム、セム、ヤペテ以後の諸民族に関する系譜学も、エウセビオス以後、ローマ時代に整備されていった。また、古代にはキリスト紀元は形成されず、むしろオリンピックアード紀元とローマ建国紀元が創世紀元と併用された。

このように古代に発生した創世紀元は、その後東と西で違った形で受け継がれた。<sup>⑬</sup> まず東では、5世紀前後に「アレクサンドリア創世紀元」が成立した。これはキリスト生誕を5493年とするものであった。このアレクサンドリア創世紀元は次第にビザンティン帝国の歴史叙述で多く使用されるようになり、やがてこれを基礎に7世紀末までに、「ビザンティン創世紀元」が成立した。これは創世紀



元元年をキリスト生誕前5509年の9月1日に置くもので、以後ビザンティン帝国時代を通じて使用された。この間、それはビザンティン帝国のみでなく南イタリア、シチリア、ロシアにも広まった。これらの地域では帝国滅亡後はディオニシウスによるキリスト紀元、またはヘジラ紀元が採用されていくが、しかしロシアではなお1700年にピョートル大帝がキリスト紀元を採用するまで使用された。これらの創世紀元はいずれも七十人訳『聖書』とユリウス・アフリカヌスの年代学をもとに成立していったものである。また年代学の発展という点についていえば、西欧に比べて遥かに活発な議論が行われていった。<sup>⑭</sup> ビザンティン歴史家たちの議論は大洪水が全世界をおおったか否か、歴史の終末はいつか、王権は神聖であるか否かなどの問題をめぐって行われ、これらの議論は、やがてルネサンス以後、西欧における年代学論争にも影響を与えた。

他方、西ヨーロッパで決定的影響力を持ったのはエウセビオス＝ヒエロニムスの年代学だった。「6世紀から14世紀までの年代学は、エウセビオスとヒエロニムスの諸概念をオウムがえしにするのみで新しい考え方などはほとんど発展しなかった」<sup>⑮</sup>とすら言われている。このように歴史観そのものは古代と変わらなかったとしても、しかし、中世西欧はそれに一つの紀年法をつけ加えた。それこそ上述の「キリスト紀元」に他ならない。ただし、創世紀元（世界年代）は、古代末期以来中世を通じて使用された紀年法であったという意味でも、さらに、天地創造（アダム）から最後の審判に至る人類の歩み全体を包摂した、キリスト教の世界観そのものを表現するものであるという意味でも、最も根本的な紀年法であった。キリスト紀元は、これに対しては、あくまで「キリスト以後」のみを対象とする紀年法だったのである。したがってまた、このようにキリスト紀元が創世紀元を背景にしている限り、ことさらに「キリスト前」に逆上

る必要もなかったのである。

さて、創世紀元（世界年代）は上述のように古代に生れ、中世を通じて最も根本的な紀年法として使用され続けたが、しかし、16世紀を過ぎるといわゆる「年代学論争」により、その地位が揺らぎ始める。論争は18世紀まで続き、従って創世紀元も18世紀までは各国で命脈を保ち続けるが、この間、次第に創世紀元にかわってキリスト紀元が優勢となっていく。そして19世紀にはいると、われわれは、「キリスト前」を含んだキリスト紀元以外の紀年法には、もはやほとんど出合わなくなるのである。この変化をもたらした「年代学論争」について次節で考察してみたい。

## 二、「普遍史」と「年代学論争」

### 1. 「普遍史」の構造

「年代学論争」に入る前に、まず16世紀以後にドイツ人によって叙述された二編の「普遍史」を紹介し、その基本構造を明らかにしておきたい。それによって論争が行われた時代の世界史叙述の問題性がより鮮明になると考えるからである。

最初に取り上げるのはスレイダヌスの『四世界帝国論』（1556）である。<sup>⑯</sup> 彼は著名な『カールV世時代の宗教と国家』（1555）によって宗教改革時代のドイツに関する不朽の歴史叙述を残し、「ドイツ近代歴史学の創造者」<sup>⑰</sup>とされる歴史家である。そして彼の第2の主著である本書も「幾重にもプロテスタント歴史教育の基礎となっていった」<sup>⑱</sup>と評価されている。本書の構造は、四つの世界帝国の出現以後に関する部分と、出現以前の時代について述べる部分からなっている。もちろん、表題からも明らかなように四世界帝国、特にローマ帝国についての叙述が本書の主要なテーマである。

まず「前史」の部分では、彼は創世紀元1656年に起こったノアの洪水から説き始め、バベルの塔（1787年）や「世の権力者となった最初の人」ニム

ロデの出現など、「創世記」に依りながら記述していく。続く時代で彼が重視するのはヘブライ人とアッシリアである。ヘブライ人についてはアブラハムのハラン出発（2024年）、を経てダビデ、ソロモンから王国分裂後までの歴史をたどる。アッシリアについては旧アッシリアと新アッシリアに時代区分して叙述する。前者はニムロデから3代目のニヌスを始祖とし、サルダナパルスで終わる。後者はベロクス、その子供ブルから始まり、イスラエル王国を滅ぼしたシャルマナサルなどについて叙述される。

次いで四世界帝国の継起する時代となる。最初の世界帝国はバビロニア人で、第2代のネブカドネザルにより、ユダ王国が滅ぼされる。また王の夢を解いたダニエルを通じて四世界帝国についての神の予言が示された。第2の世界帝国はペルシア、第3はアレクサンドロスの築いたギリシア人の帝国である。帝の死の年号については「第114回オリンピックアード、ローマ建国後429年、キリスト生誕前323年」<sup>⑭</sup>と記している。第4はもちろんローマ帝国である。ローマの歴史についてはアウグストゥス以前と以後とに大きく分けて記述する。まず前者では、「驚くべき巨大さに達するよう、神の定め給うた」<sup>⑮</sup>ローマの3212年の建国から始め、王政時代、二人のコンスル時代、ポエニ戦争やカエサル征服事業を記述する。「第4のかつ最後の帝国」<sup>⑯</sup>を建設したのはアウグストゥスであった。この初代皇帝の治世中の3954年、イエスが誕生したことは偶然ではない。アウグストゥス以後は各皇帝毎に皇帝自身とその治世中の出来事を述べていくが、ここでは省略し、二点だけ紹介したい。第1点はローマ帝国をあくまで「最後の帝国」とする彼の議論である。その立場から彼は「ローマ帝国がシャルルマーニュ皇帝によって復興され、またローマ帝国が新たな国家として再び自己の色彩と美とを帯びるに至った」<sup>⑰</sup>ことを高く評価する。即ち、第4の帝国としてのローマ帝国は、古代のロー

マ帝国だけでなく、シャルルマーニュを媒介として神聖ローマ帝国まで含むものである。第2点は、かかる意味での「ローマ帝国」の未来に関する彼の叙述である。彼は当時帝国はドイツのみに縮小し、しかもその帝国がトルコ人とローマ教皇により大きな危機に直面させられていると述べる。しかし他方、「彼らはローマ人の偉大さと比較できるような地位には決して自己を押し上げることはできなかったし、また縮小してしまった帝国の残骸を征服することもできないであろう。なぜなら、第5の帝国を建設することは不可能なのであるから。真実はドイツのみが帝国の名称と地位とを所有しているということに存する。<sup>⑱</sup>」こうした事態は既にダニエルによって予言されていたのであり、またその予言によればトルコの脅威はこの世の終わりまで続くと定められてはいるが、しかしトルコの拡大はこれ以上はありえない。<sup>⑲</sup>「我々はくじけてはならない。むしろダニエルの言うように、この苦悩のすぐ後にやってくる、キリストの来臨による開放を待つべきなのである。<sup>⑳</sup>」こう読者に呼びかけながら、スレイダヌスは本書を閉じている。

次に紹介するのはヨハン・ヒューブナーの『政治史問答』（1702）である。<sup>㉑</sup>本書は先のスレイダヌスのような高名な歴史家の手による研究書ではなく、ギムナジウムの教科書である。本書が出版された18世紀初頭は、ドイツの大学でもドイツ語で歴史講義が行われはじめ、またドイツ語で歴史教科書が書かれ始めた時代であった。ヒューブナーはそうした時代のなかで、宗教教育で使用されてきた『教義問答書』の形式を借りてこの教科書を書いたのである。本書はこうした問答形式の教科書としては最初のものであるだけでなく、そのモデルにもなり、以後多くの問答形式の教科書や一般向けの歴史書が現われた。ヒューブナーの書自身も1722年には10巻本にまで成長し、子供だけでなく、大人をも対象とする書物となった。さらに彼の死後は息子が1743年から58年にかけて22



巻にまで拡大した。小型本ながら全巻が千頁をこえる大著となったが、こうして彼の教科書は18世紀における最も人気あるものの一つとなり、また多くの大人の読者も持ち続けた。今日では当時の教科書や様々な一般向けの「普遍史」は、ドイツではほとんど顧みられることはない。<sup>29</sup>しかし上のような事情から、当時ドイツにおいて一般に流布していた世界史叙述がどのような構造を持っているかを知るためには、本書は格好の素材となるものなのである（資料1参照）。

本書の構造自体については、実はあまり新たに紹介すべきことはない。先に紹介したスレイダヌスの「普遍史」とは、最初の世界帝国をアッシリアとしバビロニアを後期アッシリア時代の王国として扱う点以外は、構造がほとんど違わないからである。しかし筆者は、150年を隔てて書かれた二編の普遍史叙述がその構造を同じくしていること自体に大きな意味があると考えるのである。そこでここではその意味について、2点を押えておきたい。まず第1点は、プロテスタントは、その世界史叙述に当ってはカトリック的「普遍史」の構造を受け継いだということである。もちろん、例えばローマ教皇に対する否定的評価など、細部での相違はある。しかし、それはやはり天地（アダム）の創造から最後の審判までの時間的枠組を持ち、その時間的推移を創世紀元（世界年代）を用いて記述する。さらに、アダムからノアの洪水まで、ノアの洪水による人類史再出発から第1の世界帝国成立の時代まで（この段階ではヘブライ人の歴史が柱となる）、次いでアッシリア（バビロニア）、ペルシア、ギリシア、ローマの四世界帝国の継起する時代へと叙述をすすめる、そして第4の「ローマ帝国」の時代は古代ローマだけでなく神聖ローマ帝国をも包摂し、かかる意味での「ローマ帝国」は最後の帝国であり、これが滅びる時は人類史も終末を迎えるとする。この基本構造もカトリックのそれと同一である。そしてスレイダヌスからヒュー

プナーまで、プロテスタントもカトリック同様の基本構造を18世紀まで継承しているのである。<sup>30</sup>第2点は、「普遍史」の対象とする「世界」は、プロテスタント、カトリックのいずれも、極めて狭小なものだったということである。それは「普遍史」を自称しているにもかかわらず、実際には今日われわれのいうバイブル・ランド、「地中海世界」、及び「ヨーロッパ世界」のみを含む「世界」しか対象としていなかったのである。イスラム教徒、トルコ帝国などが叙述の対象となる場合も、上の意味での彼らの「世界」と関係する場所のみでしか扱われず、インド、中国といったそのさらに東のアジア世界などは視野に入っていないのである。そしてこうした「普遍史」の「世界」の狭小性は、中世以後、少なくともドイツの教科書のレベルでは、なお18世紀まで引き継がれていたのである。

以上のような「普遍史」は、16世紀以後、二つの側面から問い直され始める。即ち、一つはその歴史観の根本となっている『聖書』の批判的研究が進化したこと、他は伝統的「世界」の狭小性の問題が前面に出てきたこと、これら両面から旧来の年代学が示す歴史の枠組そのものが問い直され始めるのである。いわゆる「年代学論争」の時代の開始である。

## 2. 『聖書』批判の展開と年代学論争

まず『聖書』の批判的研究の進展の側面から見てみよう。ここでは根本となる『聖書』自体の問題と、『聖書』の批判的研究との二点に分けて見ることができる。第1の点については、『聖書』自体何種類かのものがあり、しかもそれぞれの示す年代も相違していることが、ルネッサンス、とりわけ宗教改革以後の『聖書』の研究の盛行のなかで広く人々の間に明らかになってきた。古代の年代学者やそれを受け継いだ伝統的年代学者たちが依拠してきたのは、前3世紀にヘブライ語からギリシア語に翻訳された七十人訳『聖書』であった。そ

れに対し、改革教会は旧約に関してはユダヤ正典に従った。さらに、これ以外にもサマリヤ人の伝えた『サマリヤ五書』が存在する。それだけでなくそれぞれにまた伝承の過程で生じた異本が存在した。そして例えばノアの大洪水の年代は七十人訳では2242年、ヘブライ語版では1656年、サマリタン版では1307年となり、また、大洪水からイエスまでは、それぞれおよそ3000年間、2300年間、3000年間となる。アダムからイエスまでの合計年数では七十人訳とヘブライ語版では1500年近くも相違し、サマリタン版はその中間の数値を示すことになる(詳しくは「表1」を参照されたい)。<sup>②</sup> このように、これら各種の『聖書』は歴史的に最も重要な事件に関してすら様々に異なった年号を与えていたのである。キリスト教年代学の根本たるべき『聖書』自体がこのような状況だと広く明らかにされたことは、それ自体「年代学論争」の一結果でもあるが、同時にまた論争を激しくさせる原因ともなった。

『聖書』の示す年代が多様なものであることが広く知られたことは、それだけで既に伝統的な年代学を大きく動揺させるに十分であったろう。しかしさらに第2点として、この間『聖書』に対する批判的研究も推進された。長らくモーセ自身が記述したと信じられてきた「モーセ五書」については、ホップズが「『モーセ五書』は、どれくらいあとかははっきりしないまでも、モーセの時代以後に書かれたことは十分に明らかである<sup>③</sup>」と主張し、また『聖書』の言語学的・文献学的研究を主張したスピノザは「五書」の著者はエズラだと推定した。<sup>④</sup> さらに「リシャール・シモンとその著『旧約聖書の批判的歴史』(1678年)によって批評学はその力を自覚した。<sup>⑤</sup>」即ちポール・アザールの紹介によれば、『聖書』は全ての神の預言からなっているのではなく、特に歴史的記述の部分はユダヤの記録係が書き、編集したとする自己の主張を、シモンは「批評(批判)」を通じて徹底的に論証していっ

たのである。しかも彼によればユダヤの記録係は、その歴史的記述を残す際、ユダヤ人に関係することしか記録しなかったのであるから、彼らの記録だけを根拠に現実の歴史を構想することは、むしろ滑稽なことになる。次いで18世紀半ば、ルイ14世の侍医であったジャン・アストリュクの画期的発見が行われた。即ちアストリュクは創世記にヤハーウェとエローヒームの二つの神名が使用されていることから、モーセ五書は数代にわたって数人の人々によって書かれた資料を統合したものと考えたのである。<sup>⑥</sup> この発見は19世紀における『聖書』の歴史的・批判的研究へと直接つながっていく。このようにしてキリスト教年代学は『聖書』の批判的研究の面からも大きく動揺せざるを得ない状態に陥っていった。ただしその「動揺」は直ちに創世紀元(世界年代)の放棄につながらなかった。むしろ、基礎の動揺こそがかえって「年代学論争」を激しくしたとすら言えるであろう。それは、年代学がキリスト教の世界観と分かちがたく結びついていたからであり、また年代学を論ずる背後には、キリスト教的世界観擁護への激しい情熱が渦巻いていたからである。こうした事情は、結果として聖書年代学自体の基礎を掘り崩すことに手を貸したりシャル・シモンについてすらあてはまる。即ち、彼が『聖書』の批判的研究を推進した時、その根底にあった主観的意図は、聖書には人間の手になる部分もあることを示すことで聖書絶対主義の立場をとるプロテスタントを批判し、カトリックを擁護しようということだったのである。<sup>⑦</sup>

なお一点ここでみておきたいことがある。それは、キリスト教年代学は天地(アダム)の創造から始まるだけでなく、最後の審判をもって人類史が終末を迎えるとする時間的枠組を持っていることである。そしてこのこともまた、年代学論争の心理的原因となったと筆者は考えている。というのは、神が六日間で世界を完成させたという「創



世記」の記述を根拠として、人類史の期間を6000年間とする固定観念が古くからあり、<sup>33)</sup> この固定観念も年代学論争に微妙な影を落とすことになるからである。上にのべたように、アフリカヌスはイエス生誕を創世紀元5500年と考え、エウセビオス＝ヒエロニムスの年代学ではイエス生誕は5199年とされている。これは古代のキリスト教年代学者たちが「終末」をかなり身近に感じていたことを示すが、しかし、この年代学をそのまま受け入れると、9世紀までに終末が訪れなかったことはおかしいことになる。こうした事態のなかで10世紀始めのビザンティン年代学者ケドレヌスは、「創世記」に神が「第7日目に休まれた」とあることから終末を「7000年後」と考えた。<sup>34)</sup> これは、七十人訳『聖書』に基づき、天地創造を前5509年に置くビザンティン創世紀元の世界における一種の「合理化」であると思われる。他方、6000年間という概念とエウセビオス＝ヒエロニムスの年代学が保持された中世西ヨーロッパでは、9世紀以後の時代は、両者をともに信ずるものにとってはいつ終末となってもおかしくない、極めて不安定な時代とならざるを得ない。しかしこうした不安定さは、イエス生誕が創世紀元4000年前後となるヘブライ語版『聖書』を採用すれば解消するのである。もちろんヘブライ語版『聖書』が年代学論争で大きな役割を占めたのは、それが「原典」であるという理由によっている。また、筆者も年代学論争に上の「不安定さ」が直接影響を与えたという証拠を持っているわけではない。しかし、スレイダヌスの例で見たように「普遍史」はその性格から必然的に終末論を内包しており、また年代学論争が行われた時代は様々な「千年王国論」や終末についての「預言」が行われた時代でもある。「科学革命の世紀」を代表するニュートンですら、終末の年号の算定に取り組んでいた時代である。<sup>35)</sup> こうしたことを考えると、上にあげた「不安定さ」もまた『聖書』そのものの研究の盛行や年代学論争の一つの心理的

原因としてあげることができるように思われるのである。

### 3. 「普遍史」の構造と年代学論争

さて、伝統的「普遍史」の改変をせまることになった第二の契機に移ろう。それは年代学との関係でいえば異教徒の世界の古さの問題と言えるが、同時にまた、上で述べた「普遍史」を構成していた「世界」の狭小性の問題でもあった。ここでもまた、問題を2点に分けて見ることができよう。まず第1点は、アッシリア、エジプトという、既に知られていた古代世界の異教徒の古さの問題である。このうちアッシリアについては、クテシアス、ベロソスらにより、ベルスを始祖とし、ニヌス(ニノス)、セミラミスらを経てサルダナパルスに至る1360年間にわたるアッシリア史が伝えられていた。他方、『聖書』ではハムの子孫でニネヴェ建設者であるニムロデ、セムの子孫アシュルの名があるが、次に登場するブル、シャルマナサル、センナヘリブらの時代までは大きなブランクがある。ただ幸いにも上の伝承と『聖書』の記述とは、スレイダヌス、ヒューブナーの例のようにアッシリア史を新、旧、または分裂前、分裂後と二段階に時代区分することで、つなぎ合せることが可能だった。今日からみても、その結果はアッシリアの第1興隆期(前10世紀初～8世紀初)と、前8世紀半ば、ディグラト・ピルセル(＝ブル)即位以後の第2興隆期(古代世界帝国段階のアッシリア)に対応しているとも言えるかもしれない。しかもこのアッシリア史像はノアの洪水以後の年代的枠組にもうまくおさまリ、この問題は辛うじてしのぐことができたとはいえよう。

しかしエジプト史については問題は簡単には片づかなかった。エジプト史については、周知のように、前3世紀にヘリオポリスの神官マネトーがギリシア語で著した『エジプト誌』があり、これについては既にアフリカヌスやエウセビオスも研究

していた。しかし二人は、ガッテラーの計算によれば古王国、中王国、新王国の合計年数をそれぞれ5000年弱、5500年弱と算定せざるを得なかった。<sup>36</sup> 一方、『聖書』の立場から言えばエジプト人はあくまでハムの子ミツライムの子孫でなければならない。従って、『聖書』の枠に当てはめるためには3000年近くもエジプト史を切り詰めねばならないことになる。この問題に両人がどのように折り合いをつけたかについては、残念ながら現在の筆者にはつまびらかにすることはできない。ただ、「もし年数がまだ過剰だとすれば、多分いくつかのエジプトの王国が同時に統治したということが推測されねばならない<sup>37</sup>」というエウセビオスの言葉からは、「解決」のひとつの方向は示されたとは言えよう。しかし、この問題は大きな宿題として残されたと考えざるを得ない。さらにルネッサンス後の年代学論争の行われた時代にはいると問題は一層深刻となった。「この論争（年代学論争、筆者）を通じて十六世紀から十八世紀の間に、最も重視された古代の歴史家はヘロドトスであった」が、<sup>38</sup> 彼はエジプト人神官の主張を詳細に紹介し、結論としてエジプトには神々の時代は別として「一万一千三百四十年」<sup>39</sup> もの人間の歴史が続いてきたと述べていたのである。この年代は余りにも聖書の示す年代とは隔たりがあった。この問題についてはスレイダヌスは沈黙している。ヒューブナーも「エジプト人は既に久しい以前からファラオと呼ばれる国王によって統治されていたが、これについては疑問な点が多い」と述べ、古さについて論ずることをやはり避けている。逆にこの問題を正面から取り上げて「年代学論争」に一石を投じたのがニュートンだった。彼は自らの手で確立された天文学によってアルゴナウテース遠征を前939年の事件と算定し、ここで得た絶対的年号を基礎にエジプトにおける人間の歴史の開始点となるメネス王を前946年に置いた。ニュートンはこのようにエジプト史を大幅に切り詰めることにより、エ

ジプト史を旧来の「普遍史」の枠組の中に組みこみ、またそのことによって伝統的な「普遍史」（キリスト教的世界史像）の構造を守り得たと信じたのである。<sup>40</sup> しかし、エジプトの「古さ」の問題がこのニュートンの断定によってい解決されたとは到底言い得ないことは、火をみるより明らかなことである。このエジプト史の問題は、場合によっては伝統的「普遍史」の構造をそれだけで破壊し尽くしかねない破壊力を持った問題として、今後も「普遍史」を脅かし続けることになる。

上のエジプトの問題が「普遍史」の枠を内側から突き破る力として働いたとすれば、これを外側から突き崩す力として働いたのが新大陸や、東洋世界、とりわけ中国の問題であった。上述したように、もともと「普遍史」が叙述の対象としていた世界は今日から見ればとても「世界史」とはいえぬ程に狭小なものであった。しかしそれはそれで、少なくとも中世においては、まさに彼等の「世界史」でもあったという点には注意しておかなければならないだろう。なぜなら、中世における世界観を图示した世界図である「TO図」や、またヘレフォードの『世界図』が詳細に描いているように、中世の人々にとって「人間」の住む場所の広がりにはヨーロッパ以外では精々アフリカ地中海沿岸と、いわゆるバイブル・ランドまででしかなかったからである。勿論、この「人間」の住む世界の外の世界も彼らにとっては未知の世界というわけではなかった。但しその世界は、セビリヤのインドールスが『起源論』（622～623）でプリニウスやソリヌスによりながら描いて以来、恐るべき妖怪変化に満ち満ちた世界だったのである。<sup>41</sup> こうしたヨーロッパ人のアジア像が最もグロテスクな形で現われた行動として、十字軍のマアッラなどで行った残虐行為をあげることができよう。<sup>42</sup> アジアを化物の住む地域とする閉鎖的な世界観に対しては、13世紀に入ると、モンゴル人の活動、彼らの地を実際に訪れたマルコ・ポーロを始めとする



ヨーロッパ人の報告などによって風穴が開けられた。しかしこの風穴はオスマン・トルコの抬頭によってヨーロッパ人が再度アジア世界から遮断されたことで、閉じられてしまった。中世的世界観を典型的な形で今日まで残しているヘレフォードの『世界図』(ca.1300)は『東方見聞録』(1298)と同時代に製作されたものである。そしてマンデヴィルの『東方旅行記』(1362)では、エジプトのサルタンや中国(カタイ)の皇帝などの叙述と、「素晴らしい妖怪変化のコレクション」<sup>43)</sup>とが織り合わされたアジア・アフリカ像が示されている。本書は15世紀に入ると伝説から蘭、伊、独、西、英語に訳されて広く読まれ、コロンブスも本書を読んでいたろうといわれる。こうして「十五世紀ヨーロッパ人の東洋像は、真と偽、新旧の知識が入り乱れた状態」<sup>44)</sup>となっていた。しかも、この後もヨハン・ベムスの『世界風俗集』(1520)、セバステイアン・ミュンスターの『世界誌』(1544)はじめ、大航海時代のまったかなかの16世紀の人文主義者たちによって、なお「空想的化物世界誌」が叙述され続け、しかもいずれも各国語に翻訳され、印刷術によって広く流布していくのである。<sup>45)</sup>

このような「空想的化物世界誌」と表裏の関係にあったのが、「普遍史」の世界の「狭さ」だったと筆者は考える。すなわちヨーロッパ人にとっては、中世以来、「キリスト教徒共同体(corpus christianum)」に属する者のみが真正な「人間」なのであって、「普遍史」とは、まさにそうした意味での「人間」の「世界」を普遍的に叙述するものに他ならなかったのである。そして、かかる意味で、「普遍史」は同時に「世界史」でも有り得たのである。即ち、彼らがアダムとエヴァから始まり、四世界帝国で終る人類史の叙述をオリエントと地中海世界、ヨーロッパ世界のみで展開しながら、なお自己の叙述を「普遍史」と心安んじて呼ぶことができた背後には、この「空想的化物世界誌」という支えがあったのである。しかしそうだ

とすれば、ヨーロッパ人が自らの手で行った「新世界」の発見は、当然旧来の「普遍史」が依って立っていた「世界」そのものの構造に大きな改変を迫ることになるはずである。それは、コロンブス自身が驚きをもって報告しているように、かの地にはまさに「人間」が住んでいたからである。<sup>46)</sup> もっともこの場合容易に想像できるように、全てのヨーロッパ人がインディアンを直ちに「人間」と認めたわけではなかった。インディアンを「人間」としてみとめるか否かに関しヨーロッパでは論争が起こり、これに決着をつけると同時に「当時のヨーロッパ人に対して、大きなショックを与えた」<sup>47)</sup>のは、1537年のローマ教皇パウロ3世の宣言、「アメリカ・インディアンも私達と同様、人類である。アダムとエヴァの子孫なのであります」という宣言であったと言われる。<sup>48)</sup> しかしなお1550年にはバリャドリにおいて有名な論争が行われている。そこでインディアンは「人間」だと主張するバルトロメ・デ・ラス・カサルに対し、アリストテレスの「先天的奴隷論」に依りつつ、インディアンは人間としても、なお「劣った人間」だと主張したセブルベダは、スペイン人が新大陸で推進したエンコミエンダ制の擁護という政治的意図を背景に持っていたとはいえ、同時にまた、伝統的世界観を固執する当時のヨーロッパ人の心理をも背景にしていたとも考えられよう。<sup>49)</sup> この問題は、この後少したってようやくモンテーニュにより、一つの解決を見ることになる、即ち、モンテーニュは『随想録』(1580)で、「新大陸の国民について私が聞いたところによると、そこには野蛮なものは何もないように思う。もっとも、誰でも自分の習慣にないものを野蛮と呼ぶなら、話は別である。……だがあの新大陸にもやはり完全な宗教と完全な政治があるし、あらゆるものについての十全な習慣がある」<sup>50)</sup>と述べるに至るのである。こうしてヨーロッパ人は、モンテーニュを通じて、「新大陸」をようやくそれ自身「完全な宗教と完全な政治」を

もつ「世界」として認知するに至ったのである。と同時に、また、中世的な世界観を自ら破棄して「ヨーロッパ世界」を地球規模の「世界」のなかの一つの世界として意識するようになるのである。そして、さらに、ヨーロッパ世界をこのように相対化してとらえるにいたったことは、従来の「普遍史」の世界がその根本を掘り崩されたことをも意味する。もっとも、さしあたりは「普遍史」はこの新世界の登場という事態に対しては、アッシリアの場合と同じように、持ちこたえることはできた。というのはモンテーニュ自身が、「われわれの世界は最近、別の世界を発見した。……この世界はわれわれの世界に劣らず大きくがっちりして、手足も遅しいが、あまりにも新しく、あまりにも子供で、いまだにABCを教わっている」<sup>⑤</sup>としているからである。すなわち、「世界」そのものは旧来の構造を変えたが、新大陸を「子供」の世界としヨーロッパを大人の世界とすることで、その新たな「世界」において辛うじてヨーロッパが中心的位置を維持することができたからである。新世界は今後もなお「幸福な自然人」、「善良なる未開人」というイメージの根源となり、さらには様々なユートピア思想のイメージの提供者となってヨーロッパ世界に対する批判の素材を提供し続けてはいくが、しかし「普遍史」の構造を根本的に変化させるだけの破壊力を発揮することはなかった。

しかし中国の問題は、エジプトの場合同様、簡単にはいかなかった。ヨーロッパ人と中国との接触は、1601年、明朝の神宗万暦帝時代にイタリア人イエズス会士マテオ・リッチが北京に入場して以降のことである。以後アダム・シャル、フェルビーストらのイエズス会士達が中国入りし、彼らの手で中国文化がヨーロッパに紹介されていく。そして、17世紀末、ルイ14世がフェルビーストの呼びかけに応じ、フォンターネを団長とするフランス・イエズス会士布教団を清朝中国に派遣したことが、ヨーロッパと中国との関係における一大

画期をもたらした。フェルビーストはフランス・アカデミー会員であり同時に宮中御用係という官職を帯びたまま中国布教団団長となったのであり、中国における見聞や学術研究を本国に報告すべき義務も負っていたのである。17世紀中にもたらされた情報とともに、これらフランス・イエズス会士たちの系統的な中国紹介は、ヨーロッパ人に対し西欧以外の地に高い文化を持つ巨大な帝国が存在する事実を認めざるを得なくさせていった。こうして18世紀に入るとヨーロッパ人は中国文化と何らかの意味で対決さざるを得なくなっていく。それは、中国文化は新大陸のそれとは違って「大人の文化」であり、その点でヨーロッパの文化とは同格のものであったし、また中国文化がロココ文化成立に深い影響を与えたように、ヨーロッパに大きなインパクトを与える力を持つ文化だったからである。そしてこうした事情がモンテスキュー、ボルテールなどの啓蒙主義者の中国論をはじめ、18世紀ヨーロッパにおける中国研究の興隆をもたらし、またフランスの東洋学を成立させていくのである。そしてヨーロッパ人の中国文化への関心の高まりに応じ、フランス東洋学がその「三大名著」、『イエズス会士書簡集』（1703～1776）、デュ・アルド『シナ帝国全誌』（1735）、『北京・イエズス会士紀要』（1776～1814）などを産み出していくことになるのである。<sup>⑥</sup>

中国をめぐる問題は多岐にわたっているが、ここでは「年代学論争」にかかわる、古代中国史の問題のみに限定してみよう。<sup>⑦</sup> 中国史の古さについては16世紀末以来断片的に情報がもたらされていた。他方現実問題として、中国で布教活動を行っていたイエズス会士達は、中国の歴史の古さに対応することに苦慮していたようである。イエズス会士たちは、多分1637年、中国では布教活動のために七十人訳『聖書』に基づく年代学を使用してもよいとする許可を受けたといわれる。それは、七十人訳『聖書』ではノアの洪水からイエス



までは約3000年間となるのに対し、ヘブライ語版『聖書』に基づく年代学では約2300年となり、これでは中国最初の皇帝の年代と調和しなくなるからであった。そして、自らも中国で布教活動を経験したイエズス会士マルティニによって、中国の古さの問題が「年代学論争」の新たな問題とし提出されることになった。マルティニは『古代中国史』(1658)で、中国最古の皇帝を伏羲としてその統治をキリスト紀元で言えば前2952年に置き、以後イエス(漢)の時代までを叙述した。伏羲の年代はヘブライ語版『聖書』から言えばノアの大洪水の前ということになり、実際マルティニは伏羲から堯までの7代を「大洪水」の前に置いたのである。この場合堯の時代に起こったとされる大洪水がノアの大洪水に比定されるわけである。しかし、これでは大洪水後ノアの家族8名から人類史が再出発するという『聖書』の記述に反することになる。彼はそこで前3000年頃と推定される時代の洪水についても中国人が伝えていると紹介する。こちらがノアの大洪水と一致するとすれば伏羲以後に歴史はノア以後の時代に納まることになる。但しその場合はヘブライ語版『聖書』ではなく、七十人訳『聖書』の年代学を採用しなければならないことになる。しかも、これでも問題は片付かなかった。なぜならマルティニは「大洪水以前、最古のアジアには人々が居住していたと私は確信している」と述べるからである。すなわち、王朝は伏羲から始まるにしても、しかしそのためには王朝が成立するに先だって既に中国には人が住んでいなければならないことになるからである。しかし、そうだとすれば、中国人はノアの子孫とは言えなくなるのではないかという問題が出てくる。またノアの大洪水が中国に及んだのかどうかも問題にしなければならない。ノアの大洪水が全世界に及んだかどうかという問題が既にビザンティン年代学で問題になっていたことは先に述べておいた。ビザンティン時代にこの問題が議論された

契機となったのは、ダビデと戦ったゴリアテが巨人であったように、洪水後に巨人が残っていたという問題であった。今回、同じ問題が巨人ならぬ、東洋に存在してきた巨大な帝国によって突きつけられることになったのである。

マルティニが伝えた中国の記録は17世紀のヨーロッパ人に強い衝撃を与えた。それは、神話や空想的物語を含め客観的事実の記述の集積という面でも、途切れることなく書き継がれてきたという記録の連続性の面でも、とても「簡単に無視し得るようなものではなかった」<sup>50</sup>からである。その記録には、しばしば天文学的記録まで伴っていたからなおさらであった。オランダ人フォッシウスのように、年代学はヘブライ語『聖書』ではなく七十人訳『聖書』に基づくべきだと主張し、またノアの大洪水は全世界を被いしなかったと説く者も現われた。こうした状況に直面して、当時ヨーロッパ人が選ぶことができた対応策は二つしかなかった。一つは中国人の伝える歴史を「神話」にすぎないとして無視することである。この立場の代表的人物はボッシュエである。他は中国史を改変して既存の「普遍史」の枠組と矛盾のないものに組みかえることである。この立場から、例えば17世紀のライデン大学の神学者・歴史学者のホーンは、ヘブライ語『聖書』に基づく大洪水1656年説を守る一方、中国の年代記は、「創世記」と同一の事件を伝えているとの前提に立ち、中国の諸皇帝と旧約聖書の家父長たちとの比定の作業を行った。ホーンによれば、両者とも土から生れたとされているから伏羲とアダムは同一人であり、神農は農業の祖ゆえカインであり、そして彼の時代に大洪水があり、また敬神家だったとも伝えられている堯はノアにはかならないとされた。このホーンの試みはその後多くの追随者を生むことになった。そして伏羲=ハム=ゾロアスター説等々をはじめ、はては中国人はそこに住みついたエジプト人を起源とするという説まで、様々な議論がなされていっ

た。また、こうした中国史をめぐる議論のなかで、当時カトリックも認めていたヘブライ語『聖書』による年代学が批判されて、七十人訳『聖書』による年代学が主張されるということもあった。ベネディクト派の年代学者ペツロン神父はこの立場の代表者である。<sup>64</sup>最後に、この中国の「古さ」問題は18世紀中もなお議論が続けられていくが、——その一例が、後に述べるガッテラーである——問題そのものの決着は上の議論の延長上では得られなかった。というより、「痛み分け」という形で終っていく。というのは、18世紀には中国史の批判的検討が深まり、その結果マルイティニらの主張する「古さ」については否定されていくことになるのだが、しかし、他方では既にボルテールがその『習俗論』によってキリスト教的世界史像から近代的世俗的世界史像への転換を成し遂げていく時代にはいっており、その中で「普遍史」そのものが次第に消滅に向かうからである。

#### 4. 年代学論争

上述の年代学論争の過程で、一体どのくらいの「普遍史」の体系が提案されたかは残念ながら筆者には全貌を明らかにすることができない。また、あとで述べる理由から、それは不可能でもある。ブリンクマイアーによれば、あるフランスの研究書には108種類が挙げられているというが、<sup>65</sup>同時にその数は容易に増やすことができようとも述べている。筆者が調べた範囲内では、1736年以後イギリスで刊行されていた『最古の時代から現代に至る普遍史』（1736～65、65巻）の第1巻序文に集められたものがある。<sup>66</sup>本書自体はサマリタン版『聖書』の年代が正しいとする立場をとるのだが、そこにはイエス生誕年に関し大は6984年から小は3616年まで96種類の世界年代による年号が収録されている（表2、参照）。表では同一人物なのに研究者の違いにより、違う年号を主張したように記載されている例がある。例えば、ベーダの唱えたは

ずのキリスト生誕年はシュトラウフによれば5199年になるが、シュブローによれば3952年ということになる。この表では、こうしたことはアッシャー、ペタビウスといった広く受け入れられていた年代学者のものについてもおこっている。こうした相違が発生する原因はいくつかあろう。一つは、後に述べるガッテラーの例のように同一人が研究の展開に従って使用する年号の体系を変える場合があり、研究者が別々の著作を選ぶ場合である。しかしそれだけではない。同一の筆者が同一の書物で別の体系を使用することすらあるのである。例えば、表1には採録したヨセフスの体系は彼がこの書物で度々使用している体系である。しかし、一ヶ所だが、全く別の体系を書き込んでいるところがある。<sup>67</sup>その場所は後の時代に誰かが挿入した可能性がないとは言えないが、しかし、読者が同一の書物で二つ年代の体系に接することには違いがない、また、古代の著作家たちの年代の表現形式は、例えば、「アダム後〇〇年」といった表現であり、この表現だとアダム創造を第1年としているのか、ユダヤ人の一般的慣習であるように、満年齢的に数えればよいのか（この場合は天地創造が行われた最初の一週間は殆ど0に等しくなる）、さらにアダム以前の「形なき」時を1年としているか、不明なのである。<sup>68</sup>そしてこれら三つのどの立場をその研究者が採用しているかによっても、ある事件に具体的年号を与える際に違いがでてきてしまうのである。このようにして研究者が違っただけで、同一人に関する解釈ですら結論が相違してくる。まして、時代や場所、信仰が違えば年代学者の数以上の数の年代学の体系が次々と提出されてきても不思議ではない。上述したように、本来根拠となるべき『聖書』自体が年号について各版の正本、異本ごとに様々に相違した記述を残しており、しかもイエスまでの一貫した年号の算定は周知のように『聖書』のみでは不可能であるし、現在なおイエス生誕年について万人の認める年号が定められ



ない状況だからである。

もちろん年代学者たちは、こうした状況を克服しようと努力もした。ヨーゼフ・スカリガーが、1583年、父親の名を取って名付けた「ユリウス周期」を提案したのもそうした目的からだった。<sup>55</sup> これは1582年のグレゴリオ暦採用直後の時代にあって、ユリウス暦を含む古代各民族の使用した太陽暦、太陰暦をはじめキリスト教年代学をも包含する共通の尺度を提案し、それによって混乱に終止符をうとうとして考案したものである。太陽章の28年、太陰章（メトン周期）の19年、インディクチオンの15年の公倍数である7980年の周期を「ユリウス周期」とよび、キリスト紀元前4713年1月1日正午から日数を通算する「ユリウス日」を設定した。この「ユリウス日」は様々な暦の間の換算や、また遠く隔たった期間の日数、特定の日の曜日や干支などを知るのにも役立つので、年代学者や天文学者が現在も使用しているものである。このように、「ユリウス周期（ユリウス日）」はスカリガーの目論見通り共通の尺度として生き続けている。しかし、古代以来のキリスト教年代学の混乱に終止符を打つという、もう一つの目論見は成功しなかった。スカリガーは最初のカオスの状態から765年後に「天地創造」が行われたとしているから、創世紀元に直して言えば、イエス生誕は3949年ということになる。しかし、この算定のほうは万人の認めるところとはならなかったからである。そして、結果論的に言えば、彼はむしろ16世紀から始まる年代学論争の出発点に立つことになってしまったのである。表2にはスカリガー後の、次に述べるような様々な意味で年代学論争時代を代表する4名の年代学者をとりあげ、その年代的枠組を示しておいた。まず、フランスのイエズス会士で「最も聡明なスカリガー模倣者」<sup>56</sup> ペタヴィウスは、<sup>56</sup> 18世紀までフランスのみでなく新教国のイギリスやドイツでも広くその権威を認められていたという意味でこの時代を代表する年代学者であった。彼

は、また、創世紀元（世界年代）と結びつけた形でではあるが「キリスト前」という年号を体系的に使用したことも重要な役割を果たした。「キリスト前」という年号は、既にベーダはじめ上述のスレイダヌスのように、個別的な形では使用されていた。しかし天地創造以後の全ての年号に「キリスト前」の年号を併記するというような組織的使用は、彼が最初ではないようではあるが、しかし広い影響力を持つ年代学者としては最初の例となった。<sup>57</sup> 次に、アッシャーはアイルランドの主席司教で強固なカルヴァン主義者であった。彼の年代学は特にイギリスで広く受け入れられ、欽定訳『聖書』の最後に付録として彼の年代が記載されていたことがあったほどである。ボッシュエは周知のようにフランスのカトリック界の最高指導者であり、年代学論争における混乱や上述のリシャル・シモンの『聖書』批判に大きな危機感を抱いて本書を著したのであった。<sup>58</sup> 彼はキリスト紀元1年を創世紀元4004年としたが、この結論はアッシャーと同一であり、ここにカトリック、新教両教会の権威者の意見の一致をみたため、年代学論争が集結するかに当時は思われたりした。しかしボッシュエの年代学は、先にも述べたように、中国を完全に無視したうえで構想されたものであった。このことが一方でやがて「普遍史」の伝統を打破するボルテールの『習俗論』<sup>59</sup> を生み出す契機となっていくのだが、他方上述のように、「普遍史」を擁護する立場からも、七十人訳『聖書』に基づくペツロンの年代学を生み出すことになった。

キリスト教年代学にまつわる困難さや、実際にそこから生じてきた大きな混乱にもかかわらず、ヨーロッパの人々がこのように創世紀元（世界年代）にこだわり続けたのは、創世紀元がキリスト教的世界観そのものと深く結合していたからである。世界年代が、キリスト教の人類史に与えた時間的枠組である天地創造から最後の審判までの期間を計測するための時計の役割を果たしていたか

らである。世界年代が神の導きによる世界の完成への歩みの段階を、即ち「普遍史」の段階を計る物差しに他ならなかったからである。こうしてキリスト教的「普遍史」が「普遍史」であるがぎり、創世紀元（世界年代）は決して破棄することのできないものであり、両者は不離一体の関係にあったのである。逆に、「普遍史」が否定されるとき、創世紀元もまた破棄されざるを得ない。そして現実にもそうした事態が起きた時、旧来の創世紀元（世界年代）にかわって採用された新たな紀年法こそ、「キリスト前」を伴ったキリスト紀元であった。しかしそこでは、キリスト紀元はもはや宗教的な性格を失った、単なる時間的物差しとしてのみ採用されるのである。そしてこうした変化をもたらしたもののこそ、「年代学論争」の最終段階としての啓蒙主義歴史学だったのである。

### 三、「年代学論争」とガッテラー

16世紀から開始された「年代学論争」は、18世紀、啓蒙主義の時代にその最終段階に達する。ドイツ啓蒙主義歴史学はガッテラーとシュレーツァーによって代表されるが、「年代学論争」の局面に限って見れば、両者の間には明瞭な段階的発展のあとが看取できる。即ち結論を先取りして言えば、ガッテラーは「普遍史」の最後の段階を代表し、シュレーツァーは「近代的・世俗的世界史」の最初の段階を代表するのである。

ガッテラーはその生涯において四種類の世界史記述を行ったが、そのいずれにおいても創世紀元（世界年代）を使用して記述を行った。<sup>64</sup> 最初の二編、『普遍史教科書』（1860）、と『普遍史序説』（1771）ではペタヴィウスの体系を採用したが、次の『世界史』（1785）では自らもその体系の成立に手を貸したとするフランクの年号体系によって叙述し、しかし最後の『世界史試論』（1792）では改めてペタヴィウスの体系に立ち戻っている（表1参照）。このように創世紀元を生涯使用し続けたことは、キ

リスト教年代学にまつわる煩瑣な作業を常に行い続けなければならなかったことを意味する。実際、彼は『普遍史教科書』序文で「年代学は歴史学にとって片方の眼である」と述べてその重要性を強調し、年代学に深く注意を払っていない同時代人のロランなどを批判しつつ、「一見して15分もあれば決定できると見えるような年号一つにも何日も費やされている」と述べ、年代決定にまつわる「筆舌に尽くしがたい作業と労苦」に言及しているのである。この表現は言葉通りに受け取ってよいであろう。彼はペタヴィウスの体系を「今日存在する体系では最良のもの」と評価してこれを採用しているが、表1でも見られるように、決して全てペタヴィウスに盲従しているわけではなく、一つ一つの年号について吟味の跡が見られるからである。しかし、こうした吟味を通じて採用した筈のペタヴィウスの体系を、彼は一度は破棄せざるを得ない立場に負い込まれてもいる。なぜ彼はこうした揺れを自ら公衆の前で晒さねばならなかったのであろうか。<sup>65</sup> この問題について答えるためには、上で述べた「普遍史」を脅かしていた諸要素の各々について、ガッテラーがどのような議論を行っているかを見なければならぬであろう。しかし、それはいずれも18世紀のドイツ啓蒙主義歴史学の内実を考える場合に大切な要素でもあるので、ここでは年代学の問題に関するかぎりでの要点のみを述べるにとどめ、詳しい議論は今後別稿で考察することにした。

結論を先に言えば、ガッテラーが明言していることではなく筆者の推定ではあるが、最大の原因はエジプトの古さの問題だったということができよう。はじめガッテラーは『普遍史教科書』で、上で引用しておいたエウセビオスの言葉に全面的に従った形でエジプト史を強引に書きかえた。即ち、プサメティコス以前はエジプトはかつて一度も統一されたことはなかったと断じ、このファラオ以前の時代についてマネトーが伝えた全ての王朝は、



年代順に存在したのではなくエジプト各地で並行して存在した小地方王国に過ぎなかったとして、並列的に並べかえたのである。これによってエジプト史を大幅に短縮し、年代的には辛うじてノアの大洪水以後の年代の枠に組み込むことに成功した。しかし新たな問題が生じた。それは、小地方王国だけではピラミッドはじめ大規模な建築事業や高度な文化活動の存在を説明できない。そこで彼は『世界史』ではこうした立場をゆるめて200年間の統一時代を導入せざるを得なくなったのである。そのために、彼はペタヴィウスの体系を捨ててフランクの年代学に乗り替えたのであった。しかしその後、前稿でも述べたように、あらためて『世界史試論』では諸王朝の並立時期を再調整し、その結果200年間で再び折りたたんで再度ペタヴィウスの体系に戻ることができた。先に筆者はエジプト史の持つ「破壊力」という言葉を使ったが、ガッテラーはこうにしてその破壊力に耐えて最終的には「普遍史」の枠内にエジプト史を吸収した形に収めることができたとは言えよう。しかし、その過程で実は極めて大きなものを彼は失ったと、筆者には思われる。というのは、ガッテラー自身が自己のこのような「動揺」をどのように感じたかは別として、読者の側から言えばこれは実に驚くべき出来事だからである。何しろ読者自身の生きている年代について以前のガッテラーから創世紀元で5700年代だと説明されていたものが、次の著書で突然200年も違っていたと言われたことになるのだから。そしてさらに次の著書で元のままの年号でよいと言われたとしても、それで読者が得心したとは筆者にはとても想像できない。やはりエジプト史は、こうしてガッテラー自身に対しても「破壊力」を発揮したと言わなければならないであろう。

もう一点問題がある。中国史の古さの問題であるが、この問題には『聖書』の批判的研究の発展が関係してくる。ガッテラーは『普遍史序説』の

段階で、中国人が自身の歴史を極めて古いものと主張していることについて「彼らは子供がボールを弄ぶように何百万年という年数を弄んでいる」<sup>⑥6</sup>と批判し、「理のわかった中国人がその歴史の確実な始まりとするのは堯の時代である」<sup>⑥7</sup>としてこれをノアの大洪水後、エジプトのネメスなどと同じく世界年代1800年代に置いている。問題となる中国人の祖先については、彼らが膨大な年数の古さを主張する古い家系について「多分大洪水前の家系であろう」<sup>⑥8</sup>としてマルティニ同様に大洪水以前に中国に人々が住んでいたことを認めている。他方で、彼は「中国人は多分セム族であると考える」<sup>⑥9</sup>と言い、中国人がもともとはオクソスに住んでいたことは信じられないことではないともしながら、伏羲について西方からやってきたという伝承を伝えることで彼がセムの子孫だと暗示している。ガッテラーのこのような中国人の祖先に関する議論を支えていたのは、「大洪水が全世界をおおったかどうか、少し前まで私は疑っていた。しかし現在は確実だと考えている」<sup>⑦0</sup>とする、この時点のガッテラーの確信であった。ところが『世界史』の段階になると、ガッテラーは『創世紀』における「ヤハーウェ資料」と「エロイスト資料」の存在を認めて自ら比較研究を行い、その結果、「今日、大洪水が全世界を被うことなど不可能だと証明することはたやすいことである」<sup>⑦1</sup>と述べるに至るのである。ガッテラーはもともとエデンの園は北西インドにあったと考えていたが、大洪水はそのインダス、ガンジス流域での事件とされたのである。しかし、もしそうだとすると、先にガッテラーがその存在を認めていた大洪水以前に中国に住んでいた人々とその子孫たちはどうなるのであろうか。その件についてのガッテラーの回答は残念ながら聞くことはできない。しかしいずれにしろ、このように大洪水の一般性を否定することは旧来の「普遍史」の構造そのものを否定することになるであろう。彼がこの時点から自らの歴史叙述に「普遍

史 (Universalhistorie)」の名称を付けることをやめ、「世界史 (Weltgeschichte)」という名称を付け始めたことはそのことを暗示しているように筆者には思われる。

ガッテラーは生涯創世紀元 (世界年代) によって歴史記述を行い、また人類史 6000 年という枠組にこだわり続けた。四世界帝国論については『普遍史教科書』や『普遍史序説』で明瞭にこれを否定する叙述を行いながら、最後の著作である『世界史試論』ではあらためて四世界帝国論的な構想による叙述を試みもした。敬虔なプロテスタント歴史家としてのガッテラーは、こうして「年代学論争」と関係する局面で見れば、やはり全体として旧来の「普遍史」の側に立って活動した歴史学者とみることができよう。しかし同時にまた、彼によって「普遍史」は広い公衆の面前でいよいよその限界をあらわにしたという点も見逃すことはできないであろう。即ち、一つは彼がエジプト史を「普遍史」の枠組に押し込めようと努力した、その労苦の過程自身において、また中国史の古さの問題、および『聖書』批判の進展が旧来の「普遍史」の構造自体との矛盾をあらわにし始めたことにおいて、そして、こうした限界の自覚こそが、ガッテラーにおける「普遍史」から「世界史」への転換をもたらしたのではないだろうか。

#### 四、小 括

後にドイツ初期ロマン主義の理論的指導者となるフリードリッヒ・シュレーゲルは、1790 年から 2 年間、兄のヴィルヘルム・シュレーゲルとともにゲッティンゲン大学で学んでいる。晩年のガッテラーが文献学、地理学その他の歴史学補助科学の世界に没頭していたせいでもあろうか、彼の講義をフリードリッヒが聴講した形跡はないようである。兄宛の手紙からすると、彼は 1795 年になってガッテラーの著作に接したようである。しかしこれ以後はガッテラーの上記の諸著作はフリードリ

ッヒの座右の書の位置を占めるようになり、また後で述べる彼の世界史講義においても利用している。<sup>72)</sup> そしてフリードリッヒはガッテラーの「純粹に事実に基づく方法」による歴史叙述を高く評価し、彼を「ドイツにおける、根底的歴史研究の開祖」と呼んでいる。さらに、「今日なおガッテラーの著作は不可欠のものであり、また彼の後継者たちの著作を評価するにしても、それは彼の遺作を補うものとしてそうするにすぎない」<sup>73)</sup> とまで絶賛しているのである。

こうしてガッテラーを高く評価していたフリードリッヒ・シュレーゲルではあるが、しかし、「年代学論争」との関係で両者を見れば、二人の間には決定的な溝があることがわかる。というのは、フリードリッヒ・シュレーゲルが 1805 年から翌年にかけてケルンで行った『普遍史講義』で、「人類の古さに関して旧約聖書から導き出された年代は、あらゆる点から見て誤りである」と明解に論断しているからである。そして続いて「年代を決定する手段としてはギリシア史ではオリンピアード紀元、ローマ史ではローマ建国紀元、他の歴史では「キリスト前」のみであって、これ以外のいかなるものも決定手段とはなり得ない」<sup>74)</sup> とのべて創世紀元 (世界年代) を明確に否定しているからである。ガッテラーがその真摯な学究生活の生涯を閉じたのは 1799 年であった。フリードリッヒの上の言葉はそのわずか数年後に発せられたものである。まさに 18 世紀が終るとともに「年代学論争」も終焉したのである。この間、キリスト教のほうが変わったわけではない。フリードリッヒ・シュレーゲル自身は、この講義を行った頃、やがて 1808 年に行ったカトリックへの改宗に向けてその決意を固めつつあった。その意味では彼自身の生涯においても最も宗教的情熱を高揚させていた時期でもあった。そうした彼がこのような明確に創世紀元を否定したのである。従って、変化したのは歴史学のほうだと言わざるを得ないであろう。その変化と



は、一言で言えば歴史学の宗教からの自立ということであり、フリードリッヒ・シュレーゲルが歴史講義を行った時、彼は既にこの「自立」を前提として受け容れたうえで、自らの歴史観の構築に取り組んでいたのである。しかし、他方、このフリードリッヒには前提であった「自立」をドイツにおいて促進した人こそ、実はガッテラー本人であり、また彼とシュレーツァーが代表するドイツ啓蒙主義歴史学に他ならなかった。本稿が対象としてきたガッテラーは、一見したところでは全く別の顔を見せているようにも見える。しかし、筆者にはこの「年代学論争」との関係においてみたガッテラーもまた、「宗教からの歴史学の自立」に大きな貢献を行ったと思われる。それは、いわば彼が16世紀から一方向に揺れ続けてきた振り子の動きを極限まで振り切らせることによって、かえって19世紀以後の新たな方向への振り子の運動の転換を準備したと思われるからである。即ち、ガッテラーは創世紀元に最後までこだわったが、かえってそのことによって彼は創世紀元自身の限界を身をもって示すことになり、その結果、むしろその命脈を尽きさせる役割を担うことになり、さらにこの役割を通じて「キリスト紀元」の自立に手を貸すことになったと筆者は考えるからである。

## 註

1. ドイツ啓蒙主義歴史学研究(Ⅰ-1) (『埼玉大学紀要 教養学部』第26巻 1990 所収)。
2. 前川貞次郎『歴史を考える』ミネルヴァ書房、1988、特に序章、「キリスト紀元」序説。なお、前川氏はフランスを主たる舞台として論考を行っておられる。本稿は、問題関心は共通しているが、主としてドイツ啓蒙主義歴史学を対象としている。
3. Ginzel, F. K., Handbuch der mathematischen und technischen Chronologie, 3. Bd. Leipzig 1914, S. 170ff.
4. ディオニシウスが「キリスト紀元」を創りだしたきっかけとなったのは移動祝祭日の復活祭の計算であった。キュリロスがディオクレティアヌス紀元247年(=

531年)の分まで計算していたが、それがあと6年分しか残っていないという差し迫った時点に至り、ディオニシウスはその後の復活祭の計算をする必要に迫られたのである。彼はイエスの復活がおよそ500年前の3月25日、日曜日、満30才の時とする当時一般的だった考え方に立ち、また、532年で復活祭の移動が一巡することを利用して「キリスト紀元」を定めた。つまり彼自身が生きた時代で3月25日が日曜日となる年を捜し、その年=ディオクレティアヌス紀元279年をキリスト紀元563年(532+31)と定めたのである(Genzel, S. 179)。

5. フィネガン、三笠宮崇仁訳、『聖書年代学』岩波書店昭和47年、110頁。
6. Genzel, a.a.O.S.181, 及び前川貞次郎、上掲書、4頁。なお、前川氏はイギリスの歴史家プールによって「公式の文書に現われるのは八三九年で、またローマ教皇庁では九六三年」(5頁)といっておられるが、ギンツェルはイギリスでは704年、フランスでは737年、ドイツではカルロマン時代742年の文書があると言っている(Genzel, a.a.O.S.180)。
7. Ebenda. S. 172.
8. イベリア半島では、根拠は不明であるが、前38年1月1日を紀元とする「スペイン紀元」が5世紀に発生し、14世紀まで使用された。なお、コリングウッドは「キリスト紀元」の最初の使用者をセビリアのイシドルスであるとしているが(『歴史の概念』55頁)、イシドルスはこの「スペイン紀元」を使用して記述していたようである(Genzel, a.a.O.S.175)。
9. 表1を参照されたい。なおタルムードとヨセ・ベン・ハラスタによる年代については、フィネガン、上掲書資料、64及び65頁から採録した。
10. Josephus Flavius, Jewish Antiquities (93/4), in "The Loeb Classical Library" JOSEPHUS, IV-X 彼の体系について特にIV巻39頁以下、73頁以下、305頁以下など各所で計算が行われている。また、巻末に別人の手で年代計算が行われており、それを参照して表のように計算してみた。ただし、イエス生誕年については彼はピラトについて述べている個所で、「この頃、彼を人と呼ばねばならないとしてのことだが、イエスという賢人が活動していた。というのは彼は驚嘆すべき技を行った人でありまた真理を喜んで受け容れる人々の教師だったからである」といい、やがて十字架の刑に処されたが三日後に生き返ったこと、「そしてかれにちなんでそう呼ばれるキリスト教徒たちは、今日尚消滅していない」と述べている。もちろん年号は記していない。表の年号計算が正確を期せない事情についてはあとで述べる。
11. 表1参照。ユリウス・アフリカヌスとエウセビオス=ヒエロニムスの年号計算についてはフィネガン、上

- 掲書資料, 68頁と83頁を参照した。
12. ジョンソンによれば, 古代キリスト教徒が強みを発揮する鍵となったのは, 各民族の伝える洪水伝説や巨人伝説を『聖書』によって天地創造から現在にいたる一貫した物語として提示できたことであったという。即ち, バビロニアの洪水(ペロッスス), オーギュロス, デウカリオンの洪水伝説や, ティーターン族を始めとする巨人伝説について, 「エウセビオスがティーターン達と聖書の巨人とを同じものとし, ヒエロニムスが, 洪水がこれら「勇士であり有名な巨人たち」(『創世記』6-4)を全て滅ぼしたと述べて, 議論に決着を与えた」ことであるという。  
(Johnson, J. W., Chronological Writing; Its Concepts and Development. in "History and Theory" vol. II, 1962 p.130)
  13. 以下, Ginzel, a.a.O.S. 181ff. 参照。
  14. 「全ては巨人から始まった」(Johnson, op. cit. p. 133) という。即ち, ダビデが戦ったゴリアテは巨人であった(『列王記』上, 17-4)。ノアの洪水で滅び去ったはずの巨人が残っていたことが『聖書』の記述に対する議論を呼び起こすことになったのである。
  15. Johnson, op. cit. p.131. また, Genzel, a.a.O. S.184.
  16. Sleidanus, J., De quattuor summus imperiis, 1556. ここでは英訳本; A briefe Chronicle of the foure principal Emppies, London 1563 を使用した。
  17. Biographisches Wörterbuch zur deutschen Geschichte, 3. Bd. S.2670.
  18. Sleidanus, op. cit. p.11.
  19. Ibid. p.13.
  20. Ibid. p.33.
  21. Ibid. p.70.
  22. Ibid. p.104.
  23. スレイダヌスは「ダニエル書」の解釈を通じて主張する。第7章には四匹の獣の幻が語られるが, その第4の獣がローマを指している。獣に生えている十本の角はシリア, エジプト, アジア, ギリシア, アフリカ, スペイン, フランス, イタリア, ドイツ, イギリスの十地域をさす。この獣に生じた新たな角とはトルコであって, そのために引き抜かれた三本の角はアジア, ギリシア, エジプトを意味する。トルコがヨーロッパ人から奪った地域に他ならない。そしてこれ以上角は抜かれないが, しかし他方獣を殺すのは再来のイエスだとそこで述べられているのだから, トルコの脅威はこれが限度であり, また, 一刻も早いイエスの再来を待つべきなのであると。
  24. Ibid. p.105.
  25. Hübner, J., Kurze Fragen aus der politischen Historia, 1702. 本書でヒューブナーは, 初心者にはまず梗概を学ばせるのが良いとして, そのために全体の要約を行い, 本書冒頭にそれを載せている。当時の教科書の雰囲気や内容を知るための良い資料となると考えられるので, その部分を抄訳しておいた(※以後の部分は筆者が要約したもの, 他はすべて忠実な翻訳である)。
  26. ヴェーゲレは17世紀末にケラーによって古代, 中世, 近代という画期的時代区分が生れたが, 18世紀にはそれが引き継がれた点を除いては殆ど歴史学における発展は見られなかったと, 18世紀における歴史学の停滞について強調しながら, 「ヒューブナー, クーラス, ビューナウ, エッスィヒ, ツォーブ等による新旧様々な教科書は……それらが教育的目的しか持たなかったものであり, またそのほとんど子供じみた内容のゆえに, どれもが著者の死後にいたってもなおどんなに愛好されていたとしても, ここではこれ以上問題とする必要はない。」と述べて, 広く読まれたことは認めているが, 「ほとんどの子供じみた内容」として, 相手にもしていない。  
(Wegele, F.X., Geschichte der deutschen Historiographie, 1885, S. 782.)  
フューターも同様である。彼は「長期間名声の高かった校長ヒューブナーが我々の注意を引く点としては, ……彼が歴史を神学に近付けようとして教理問答形式に変えたことだけである」と述べるのみで, 彼はヒューブナーをまるで頭から評価の対象にしていない(Fueter, E., Geschichte der neueren Historiographie, 1936, S. 188) なお, ヴェーゲレの指摘しているケラー(ケラリウス)は, 実はガッテラー自身が克服をめざした対象でもあった。だが, この点については別稿で論ずる予定である。
  27. ここで, ヴェーゲレが代表的教科書としてあげていたエッスィヒのギムナジウム教科書をもう一つの例として挙げておきたい。頁数の関係で目次と「序論」全訳を資料2として採録しておいた。やはり同様に, 「神の民」の歴史を中心とした「前史」と, それに続く四世界帝国によって「普遍史」が構成されていることがわかるであろう。
  28. 表1に挙げた各種『聖書』の年代は次のものから収録した: Allgemeine Welthistorie, 1. Theil, 1774, S. 102f 本書は元タイギリスで出版された次の書物のドイツ語訳である。"An universal history from the earliest account of time to the present, 65 vols. 1736-1765,, 本書は前川氏の前掲書では「イギリスの世界史」という名で書名が紹介されている(上掲書, 60頁)。



46. キューバ、ハイティなどの島々の発見を伝える手紙で「これらの島々で、私は今日まで、多くの人が考えているような怪物に会ったことはありません。それどころか、誰も彼もみな姿よく、その色も、垂れ下げている髪以外は、ギネアの人間のように黒くはありません。」この言葉について増田氏が述べているように、まさに「コロンブスは、ここで、マンデヴィルやピエル・ダイを信じてその存在を予期していた怪物に出会わなかったのを意外と感じ、大きなおどろきを率直に表明しているのである。」(同、39以下)
47. 今西錦司『人類の誕生』河出書房、昭和43、141頁。
48. バリャドリの論争については増田、上掲書のほか、ハンケ、『アリストテレスとアメリカ・インディアン』岩波新書を参照。
49. モンテーニュ『随想録』、1-31「食人種について」
50. 同上、3-6「馬車について」
51. 以上は、下記の書によった；  
後藤末雄『中国思想のフランス西漸』上下、東洋文庫
52. 以下は主として下記の論文によっている  
Kley, E. J. van, Europa's "Discovery" of China and the Writing of World History. (in "Amerikan Historical Review,, vol.76 - 2, 1971)
53. Ibid. p.364.
54. ペツロンの年代学については表1を参照。これは上記の Allgemeine Welthistorie から採ったものである。
55. Brinckmeier, E., Praktisches Hnadbuch der historischen Chroologie, Berlin 1882. S. 20. 彼は同じ場所で、その種類の多さについて、「ここから歴史書で世界年代を利用すると極めて紛糾し、また不便窮まりない事態が生ずる」と述べ、さらに「この弊害はその全ての歴史書を世界年代で算定したガッテラーで生じている」と述べている。
56. Josephus, op. cit. VI - p.239; イエルサレムの神殿破壊について叙述するところである(A)。また、上記の Allgemeine Welthistorie は、根拠は示されていないが、ヨセフスの別の年代体系を採録している(B)。従って、彼については都合三種類の体系が可能だということになろう。一応その体系も紹介しておく。以下は次の七つの事件の年号である。
- 天地創造、大洪水、出エジプト、第一神殿造営、
- |     |   |      |      |      |
|-----|---|------|------|------|
| A : | 0 | 2556 | 3451 | 4043 |
| B : | 0 | 1556 | 2523 | 2953 |
- 神殿破壊、キュロス1年、キリスト生誕
- |     |      |      |      |
|-----|------|------|------|
| A : | 4513 | 5133 |      |
| B : | 3545 | 4015 | 4658 |
57. この点についてはフィネガン、上掲書資料65頁参照。  
なお、さらにもっと極端な場合として、編集者が勝手

- に自分の正しいと信ずる数値を入れてしまう場合がある。これは実際にガッテラーが行っていることなのだが、本文でも述べたように、『最古の時代から現代に至る普遍史』はもともとサマリタン版『聖書』の年代を採用していた。ところがこれを後に別のドイツ語訳版を出版することになったとき、現代では考えられないことだが、その監修に加わったガッテラーが勝手に年号をペタヴィウスのそれに変えてしまっているのである。
58. スカリガーと「ユリウス周期」, 「ユリウス日 (ユリウス通日)」については、荻内清『歴史はいつ始まったか』中公新書, 昭和55年, 115頁以下参照, また, Grafton, A. T., Joseph Scaliger and Historical Chronologie, in "History and Theory", vol. 14, 1975 を参照。
59. Ibid. p.160.
60. Petavius, D., Rationarum Temporum, 1627.  
表1の数値はケルンで1720年に出版されたものから採った。
61. 前川貞次郎, 上掲書, 18頁以下。
62. 同上, 21頁。
63. 同上, 30頁以下。
64. 前稿でもあげたが, 書名は以下のとおりである。  
○Handbuch der Universalhistorie nach ihrem gesamten Umfange von Erschaffung der Welt bis zum Ursprung der meisten heutigen Reiche und Staaten, Göttingen 1761.  
○Einleitung in die synchronistische Universalhistorie zur Erläuterung seiner synchronistischen Tabellen, Göttingen 1771.  
(以下, *Einleitung*)
- Weltgeschichte, Theil 1, 2, Göttingen 1785.  
(以下, *Weltgeschichte*)
- Versuch einer allgemeinen Weltgeschichte, Göttingen 1792.
65. ガッテラーはじめドイツ啓蒙主義者は, 上のガッテラー自身の著書の表題が示すように, ラテン語だけでなくむしろドイツ語で多くの著作を残したことに注意すべきである。「年代学論争」は, 啓蒙主義時代には, 特殊な専門家の間の論争ではなく, それが公衆の前で展開された。このことも, 年代学論争に啓蒙主義時代が加えた新たな要素であると, 筆者は考えている。
66. Gatterer, Einleitung, S.644.
67. Ebenda, S.647.
68. Ebenda, S.645.
69. Ebenda, S.74.
70. Ebenda, S.44.
71. Gatterer, Weltgeschichte, S.16.
72. Jean-Jacques Anstett, Einleitung in "Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe", 14. Bd. 1960. S. XXVII f.
73. Schlegel, F., Vierundzwanzig Bücher Allgemeiner Geschichte besonders der europäischen Menschheit durch Johannes Müller, 1810. ("Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe", 7. Bd. 1966. S. 108)
74. Schlegel, F., Vorlesungen über Universalgeschichte 1805-1806, ("Kritische Friedrich-Schlegel-Ausgabe", 7. Bd. 1966. S.10)



表 1 : 諸年代学体系

	【聖 書】						タルムード	ヨセ・ベン・ハラスタ (160頃死) 『世界秩序の書』	ヨセフス (ca.37～100) 『ユダヤ古誌』	ユリウス・アフリカヌス (ca170～240) 『年代誌』	エウセビウス (263～339)= ヒエロニムス (331～420) 『年表』	ベタヴィウス (1583～1652) 『年表』 (1633)	アッシャー (1581～1656) 『新・旧約年代論』 (1650～54)	ホシュエ (1627～1704) 『世界史論』 (1681)	ベツロ ン・P 『古代復元』 (1687)	ガッテラー (1727～1799)	
	七十人訳 ギリシア語版		ヘブライ語版		サマリタン版											『普通史序説』 (1771) 『世界史試論』 (1792)	『世界史』 (1785)
	一般的 写本	コンスタンチ ノーブル版	正典	異本	正典	異本											
天地 (アダム) 創 造	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1	1	1
大 洪 水	2242	2262	1656	1656	1307	1307	1656	1656	2262	2262	2242	1656	1656	1656	2256	1656	1656
アブラハムの 召 命	3389	3469	2023	2083	2384	2384			3318	3277	3259	1782	2083	2083	2513	2022	2084
出 エ ジ プ ト	3819	3894	2453	2513	2814	2814	2448	2448	3748	3707	3689	2453	2513	2513	3943	2453	2699
第1神殿の造営 (ソロモン 第4年)	4529	4495	2993	3093	3294	3406	2928	2928	4340		4168	2972	2992	3000	4816	2973	3178
第1神殿の破壊 (セデキア 第11年)	4683	4919	3357	3523	3718	3836	3338	3338	4810		4610	3393	3416		5287	3395	3604
キュロス第1年 (捕囚からの 解 放)	4735		3409	3575	3770				4880	4943	4641	3468	3648	3468	5337	3425	3629
第2神殿再建開始 (ダリウス 第2年)	4753	4995	3427	3583	3788		3404	3404			4681	3484	3486		5351	3464	3670
キリスト生誕	5270	5508	3994	4111	4305	4424	3760 3761 3762		5440	5500	5199	3980	4004	4000	5873	3983	4181
							Adam満 1歳= AM.1と した場合。 「形なき」時 だと⇒ +2 Adam創 造だと⇒ -1	ラビ・ヨ セ	イエス生誕を4BC として計算。但し、 X - viii - 5によると、 イエス生誕が5133 となる。	3707 = オーギュストの大 洪水, 18王朝アモ ス王時代。 4727 = 01. 1 - 1		AD.1 = 3984		AD.1 = 4004		AD.1 = 3984	AD.1 = 4182
							* F. 65頁	F. 64頁		F. 658	F. 83頁		* 前川,		*		

※ ※ : Allgemeine Welthistorie, 1. Theil, 1774, S. 102f.

F : フィネガン, 『聖書年代学』, 岩波書店 昭47.

表2：イエス生誕年に関する諸説

	年 月		年 月
Alphonsus König von Castilien in Müllers Tafern	6984	Michel Möstlinus	4079 3
Eben derselbe bey dem Strauch	6484 9	J. Bapt. Ricciolus	4062 3
Onuphrius Panvinius	6310	R. Moses Maimonides	4058
Suidas	6000	Jakob Salianus beim Strauch	4053 9
Lactantius, Philastrius	5801	Eben derselbe bey dem Chevreau	4052
Nicephorus	5700	Henr. Spondanus	4051 9
Clemers von Alexandrien	5624	Torniellus	4051
Die Fasti Siculi	5608 9	Wilh. Lange bey dem Strauch	4041 9
Jssac Voßius und die Griechen	5598	Eben derselbe bey dem Chevreau	4040
Eben derselbe bey dem Chevreau	5590	Erasmus Reinhold	4021 3
Theophilus von Antiochien	5515	Jakob Cappellus	4005 9
Die Constantinopolitanen und Grabens sievenzig Dolmetscher	5508 3	Johan Wickman	4004 9
Cedrenus beim Chevreau	5506	Thomas Lydiat und Laurent Eichstadt	4004
Julius Africanus, Thephanes, Euthychius u. a. m.	5500	Eduard Simpson und Erzbischof Usher	4003 9
Die Ethiopier	5499 9	M. Ant. Cappellus und Erzbischof Usher bey dem Chevreau	4000
Cedrenus beim Atrach	5493 9	Deonysius Petavius, Decker, Kepler, u.a.m. bey dem Chevreau	3984
Panodorus	5493	Petavius beim Strauch	3983
Maximinus Monachus	5491 9	Krenzheim	3971 9
Sulpitius Severus	5469	Abraham Bucholtzer bey dem Strauch	3970 9
Victor Giselius in seinem An- merkungen über den Sulpitius	5419	Eben derselbe Joh. Cluver beim Chevreau, Pantaleon, Boxhorn, Jansenius, M. Dresser	3970
Der heil. Augustin beim Genebrard	5351	Christ. Matthias und Joh. Cluuvier bey dem Strauch	3968 9
Isidorus Pelusiota	5336	Heinrich Bunting beim Strauch	3967 9
Abunazar	5328	Eben derselbe beim Chevreau und Andreas Soelmatter	3967
Rabanus Maurus	5296	Christ. Longomontanus	3966
Isidorus Hispalensis beim Strauch	5210	Christ. Longmontanus in seiner "hipothesis in Astronomiam Danicam", Tostatus, Phil. Me- lanchthon, Funccius u.a.m. bey dem Strauch	3964
Paulus von Fossebrona	5201	Melanchthon, Funccius u.a.m. beim Chevreau	3963
Eusevius	5200 9	Jakob Haynlinus	3963 3
Beda bey dem Strauch	5199	Sixtus von Siena	3962
Philip von Bergamo, Orosius u.a.m.	5198	Joh. Lucidus, Sculter, Joh. Light - foot und verschied. andere	3960
Philo der Jude, Sigebert	5096	Alph. Salmeron bey dem Chevreau, Joh. Picus Graf von Mirandola und andere	3959
Epiphanius	5049		
Metrodorus	5000		
Ado, Erzbischof von Vienne	4832		
Odiato, order Ebwico	4320		
Marianus Scotus	4192 9		
Laurentius Codomannus	4141 9		
Eben derselbe L. Godomeau bey dem Chevreau	4140		
Rebera	4095		
Genebrard	4090		
Arnold von Pontac	4088		



Lamberg, und Salmeron bey dem Strauch	3958
J. G. Herwart von Hohenburg	3955
Beda, Hermann Contractus, Ge. Herwart beim Chevreau	3952
Cornelius a Lapide	3951
Scaliger, Calvisius, Ubbo Emmius, Behmius, und Helvicus bey dem Strauch	3949
Origenes, Argoli, Joh. Seybor	3949
Christian Schotanus	3948 3
Johan Micrālius	3948
Scaliger, Calvisius, Helvicus bey dem Chevreau, Alsted u.a.m.	3947
Herman Contractus bey dem Strauch	3945 9
Johan Carrion	3944
Der h. Hieronymus in seinen hebräischen Fragen	3941
Gerhard Mercator	3928
Mattäus Beroaldus	3927 3
B. Arias Montanus	3849
Andreas Helvig	3836
Einige Talmudisten	3784
R. David Ganz beim Chevreau	3761
Die jüdische gemeine Rechnung	3760 3
R. David Ganz beim Strauch	3760
Hieronias fide, Paulus de S. Maria, Galtatinus, Georgius Venetus	3760
R. Hahson in seiner Abhandlung von den Ostercyclis	3740
R. Jason Nosen	3734
R. Abraham Zaccuth	3671
Die kleine Chronik der Juden	3670
R. Lippoman	3616

## 資料 1 ; ヒューブナー, 『政治史問答』 (1702)

(Johann Hübner, Kurtze Fragen aus der  
Politischen Historia, 1702.)

### 序論

- I. 世界が成立して何年経過したか？—天地創造より現在我々の生きている1702年まで5651年経過した。
- II. この期間をどのように時代区分すると良いか？  
—二つの最も重要な事件は：  
1. 大洪水；世界年代の1657年に起こった。  
2. キリスト誕生；世界年代3949年にあたる。
- III. 大きな時代区分としては幾つの時代があるか？  
—三大時期に区分するのが最適：  
I. 天地創造から大洪水までの1657年間。  
II. 大洪水からキリスト誕生までの2292年間。  
III. キリスト誕生から今日までの1702年間。
- ※IV～VII. 歴史は政治史、教会史、文学史、自然史、芸術史、生活史の六分野に区分されるが、「政治史なくしては、決して他の分野を理解することができない」。また各特殊史は「これに先立つ「普遍史」なくしては理解し得ない。この「普遍史」は各特殊史に基礎を与えるものであって、それゆえに「基礎的歴史」とよばれる」。
- VIII. その基礎的歴史はどのような内容か？—本書第一部の第5巻までに叙述されている内容にはかならない：  
第1巻；神の民の歴史。  
第2巻；アッシリア帝国の歴史。  
第3巻；ペルシア帝国の歴史。  
第4巻；ギリシア帝国の歴史。  
第5巻；ローマ帝国の歴史。

### 第1巻. 神の民の歴史

#### 序論

- I. 神の民の歴史とは何か？—それは世界の創造から始まって4019年のイエルサレムの破壊で終わる。
- II. この歴史はどのように時代区分されるか？—5つの時期に区分される：  
第1期. 天地創造から大洪水までの1657年間。  
第2期. 大洪水から出エジプトまでの796年間。  
第3期. 出エジプトから王国建設までの422年間。  
第4期. 最初の国王達からバビロン捕囚までの474年間。  
第5期. バビロン捕囚からイエルサレム破壊までの670年間。

### 第1章. 天地創造から大洪水まで

- III. 天地創造に関して重要なことは何か？—神が無から、しかも6日間で以下のような秩序を創造されたことで

ある：

- 創造第1日；神は光よあれと言われ、
- 創造第2日；大空を整えられ、
- 創造第3日；世界に草、木、果樹、野菜を与えられた。
- 創造第4日；天空を創られ、
- 創造第5日；魚や鳥をもたらされ、
- 創造第6日；家畜と人間を造られた。

IV. 人類以前のこの第I期に生存したのは何か？ —一部は敬神者。セツを祖とし、牧畜を営む人々で、「神の子ら」と『聖書』でよばれている。他は背徳者、カインを祖として都市に住む人々で、「人の子ら」と『聖書』で呼ばれている。

V. 背徳者たちの中で重要な人は誰か？ —

1. カイン、彼の弟アベルを殺したが故に、
2. エノク、彼の名によって地上最初の都市が名付けられたが故に、
3. レメク、彼が初めて二人の妻をめとったが故に、
4. ヤバル、音楽を発明したが故に、
5. トバルカイン、最初の鉄の刃物を鍛える者となったが故に。

VI. 敬神者たちの中で重要な人は誰か？ —

1. セツ、彼が神を彼の子孫たちの父として選んだが故に、
2. エノス、彼が最初の説教者となったが故に、
3. エノク、生きながら天に召されたが故に、
4. メトセラ、最も長く、969年間も生きたが故に、
5. ノア大洪水の以前とそのさなか、さらにその後まで生きたが故に。

VII. 大洪水に関して重要なことは何か？ —

1. それが罪ゆえに神によって引き起こされたこと、
2. 神が彼らに120年の贖罪期間を与えられたこと、
3. 箱船には8人以外の人間は乗っていなかったこと、
4. 命あるもの全てが少しずつ箱船に乗っていたこと、
5. 神が二度と大洪水を起こさぬ証として虹をかけられたこと。

## 第2章. 大洪水から出エジプトまで

VIII. どのようにして世界が大洪水の後再び人々の住む所となったか？ —

ノアはセム、ハム、ヤベテの三人の息子を得た。彼らは最初、箱船を降りた場所であるアジアに住んだ。子孫が増えた時、彼等は天まで届けようとバベルの塔を建設した。しかし神はそれを不満に思われて言葉を乱され、言葉を乱すという方法で人間を全世界に拡げられた。セムの子孫はアジアにとどまり、ハムの子孫はアフリカを占め、ヤベテの子孫はヨーロッパを占拠した。

IX. ノアの子孫のうち、神が「神の子ら」に選ばれたの

はどの一族か？ —敬虔なセムの一族であった。しかも神はセムの家系に二重の恵みを与えられた。宗教的恵みを息子のアルパクサデに与えた；族長たちが彼に由来するが故に。世俗的恵みは他の息子アッシュールに；彼によってアッシリア帝国が成立するが故に。

X. 族長達に関して重要なことは何か？ —※（アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ）……最後に彼等はモーセに率いられて……ファラオへの奉仕から解放された。

## 第3章. 出エジプトから王国建設まで

XI. この期間に起きた出来事は何か？ —※（士師たちのもとでカナンの地に定着。）

XII. イスラエルの士師の中で重要な人は誰か？ —※（モーセ、ヨシュア、サムエル）

## 第4章. 建国からバビロン捕囚まで

XIII. 神の民のもとでどのようにして王国が建設されたのか？ —イスラエル人は、近隣の異教徒が皆自己の国王を戴いていたので、もはや士師によって統治されることを望まなかった。自らの意に逆らってではあったが、神はついにサムエルを通じて一人の人間を選定し、国王として彼等に与えられた。

XIV. 国王は何代続いたか？ —

1. 最初三名の国王が神の民全体を統治した。
2. その後十九代の諸国王がイスラエル王国を統治し、
3. 同時に二十代の諸国王がユダ王国を統治した。

XV. 神の民全体を統治した国王は誰か？ —サウル、ダビデ、ソロモンである。彼等は三名合わせても百年間は統治しなかった。ソロモンの死後、彼の息子レハベアムは、十支族が彼から離れ、彼等の国王を選ぶを見なければならなかった。

※XV~XVIII. (イスラエルを治めた国王、ユダを治めた国王について。)

## 第5章. バビロン捕囚からイエルサレム破壊まで

XIX. この最後の時期について重要なことは何か？ —

1. バビロン捕囚の期間
2. 神殿の再建
3. マカベア朝の統治
4. ヘロデとその子供たちの統治

XX. バビロン捕囚で重要なことは何か？ —神の民がアッシリアの諸王に服従させられた。キリスト紀元前600年に連行されて70年間拘束された。同じ頃に活動した預言者にエゼキエル、エレミア、ダニエルがいる。バビロン捕囚からの解放を行ったのはペルシア最初の王キュロスであった。

※XX~XXII. (神殿の再建、マカベア朝、ヘロデとその子供たちの統治について)



XIII. 最後にイエルサレムはどのように破壊されたか？ — キリストの磔刑以後、神の民に山のような災難が襲い、ついにユダヤ人はローマ総督フロルスに反乱するにいたった。反乱が起こったのはネロ帝の時で、帝は將軍のウェスパシアヌスを派遣した。彼はやがて皇帝になったので、息子のティトゥスにユダヤ戦争を委ねた。ティトゥスは、紀元70年、イエルサレムを包囲した。イエルサレムは百万人もの餓死者を出した後に陥落し、瓦礫の山と化した。

XXIV. ユダヤ人はイエルサレム破壊の後どうなったか？ — 彼等は全世界に離散し、約束の地に彼等の国を再建しようとする努力も、実を結ばなかった。ユダヤ人の没落以後は、神は神の教会にあらゆる民の中から人々を集めることを良しとされた。

## 第2巻. アッシリア帝国の歴史

- I. アッシリア帝国はどれだけの期間存続したか？ — 全部で1694年間、従って、ローマ帝国の今日までの期間とほぼ同じ長さということになる。
- II. この期間をどのように理解するとよいか？ — アッシリア帝国は最初は一人の君主の下にあったが、しかしその後他に三つの帝国が分離した。したがって：
  1. 分裂以前の時代、1359年間。
  2. 分裂以後の時代、335年間。

## 第1章. 分裂以前のアッシリア帝国

- III. アッシリア帝国はいつ成立したか？ — 大洪水後約60年：最初の君主のニムロデ以後、この強力な帝国に42名の君主を数えることができる。
- IV. その君主達のうち重要な者は誰か？
  1. ニムロデ；建国者
  2. アッシュール、またはベルス；帝国の名称が由来する君主。
  3. ニヌス I；世俗的著述家達が初代だとしている君主。
  4. セミラミス；夫のニヌスを殺した後、夫の名前で統治した。
  5. ニヌス II；国土を総督によって統治し、自身は怠惰に過ごした。
  6. 特徴を指摘できるのは最初の5名の君主のみ。残り37名は享楽に時を費やした。
  7. サルダナパルス；全帝国を一人で統治した最後の王、彼以後は帝国が分裂。

## 第2章. 分裂以後のアッシリア帝国

- V. この大帝国はどのようにして分裂したか？

アッシリアの君主たちは誰にも自己の姿を見せず、後宮にこもって宦官にかしづかれていた。アルパケスが

侍従長を買収し、王宮の状態を気付かれずに観察したところ、サルダナパルスが女たちの中に一人座していた。アルパケスはこのような軟弱な男に仕えるよりは国王に反逆しようと考え、こうしてアルパケスが首都ニネヴェを包囲した時、最後の君主サルダナパルスは、薪の山を築いて火をつけ、宝物や女たちとともに焼け死んだ。この後、帝国から三つの王国が成立してきたが、これらの王国名は『聖書』に度々登場する。

## VI. 三つの王国とは何か？

- I. メディア王国、首都エクバタナ。
- II. アッシリア王国、首都ニネヴェ。
- III. バビロニア王国、首都バビロン。

## VII. メディア王国について重要なことは何か？ — ※ (アルパケス、アステュアゲス)

## VIII. アッシリア王国について重要なことは何か？

初代国王はブルで、最後の国王はエサルハドドンである。これ以外には強力な国王としてマルマナサルとサンヘリブがあげられる。前者は最後のイスラエルの王ホセアを連れ去った。また後者はイエルサレムを包囲したが、この時天使が一夜に18万5000名の彼の軍の兵士を打ち倒すということがあった。エサルハドドンの死後、アッシリアは他の二国、即ちメディアとバビロニアに滅ぼされた。

## IX. バビロニア王国について重要なことは何か？

初代国王はナボナッサル、次の王ネブカドネザルが重要。彼は神の民のバビロン捕囚を行った。最後の国王はダリウス・メドゥス。彼はペルシア帝国初代のキュロスによって王位を奪われた。

## X. アッシリアはどのようにして滅ぼされたか？

…アッシリア王国はメディア人とバビロニア人によって分割されたので、結局二つの王国、メディア王国とバビロニア王国とが残った。

メディアの国王アステュアゲスは、夢で彼の娘のマダネの胎内から一本の木が生じ、その枝が全アジアを覆うのを見た。これについて夢占者は彼女から全アジアを支配する王子が産まれるであろうと予言した。マダネが後に王子を産んだとき、父はハルパグスに彼を殺すよう命じたが、しかし彼は子供を牧者に与えた。牧者は子供を養育し、キュロスと名付けた。キュロスが成長した時、事実が発覚し、王はハルパグス自身の子供を料理させてこれを彼に命じて食べさせた。この残虐にたいしてキュロスが復讐することになる。彼は最初メディアの彼の残虐な祖父アステュアゲスから王位を奪い、ついでバビロニア国王ダリウス・メドゥスと戦った。

このようにしてキュロスはアッシリア帝国に属した全ての地域を獲得した。彼がペルシア帝国初代皇帝と呼ばれるのは、彼が最初ペルシアに退却し、ペルシア

人の援助でメディア王国を征服したからである。

### 第三巻。ペルシア帝国の歴史

#### I. ペルシア帝国はどれだけ存続したか？

200年弱；この期間に13名のそれぞれに重要な君主達が相次いで統治した。

#### II. 相次いで皇帝位を継承したペルシアの君主は誰か？

1. キュロス；彼はアッシリア帝国を滅ぼしペルシア帝国を建設した。彼の産まれについては先に述べた。彼はイスラエルの子らをバビロン捕囚から解放した。
2. カンビュセス；彼は怒りのあまり馬に乗り、うっかり鞘から抜かれていた短剣で自殺した。
3. スメルディスはただの見習いコックをしていたに過ぎなかったのだが、宦官に見いだされたのであった。
4. ダリウス・ヒュスタスベスは選挙の日、彼の馬が日の出後最初にいないたので君主となった。彼はギリシア戦争を遂行した。

5. クセルクセス1世は100万からなる軍隊を率いてギリシアに侵入したが、完敗するという恥辱を得ただけだった。

※（アルタクセルクセスI世、クセルクセスII世ゾグディアヌス、ダリウス・ノトゥス、アルタクセルクセスII世、オックス、アルサメネス）

13. ダリウス・コドマヌスはマケドニア王のアレクサンドロス大王に3度にわたり打ち破られ、最後の戦いで王位と命を失った。これによりペルシア帝国が滅亡した。

### 第四巻。ギリシア帝国の歴史

#### I. ギリシア史の区分はどのようにするのが最適か？

ギリシア人は帝国を彼等が建設するはるか以前から著名であり、従って、以下の二段階に区分することができる。

- I. 帝国建設以前のギリシア人の歴史。
- II. 帝国建設後のギリシア人の歴史。

### 第1章。帝国以前のギリシア人の歴史

#### II. 古い時代のギリシアの状態はどのようなであったか？

ギリシアの地に大洪水以後間もなく人が住んだことは疑いない。その後様々な小共和国が成立し、それらがやがて次第に一つに融合していったのである。

#### III. この小共和国の中で重要なものはなにか？

1. シュキオン；ギリシア最古の王国で、アッシリア帝国と同時代。
2. アルゴス；族長イサクとほぼ同時代。
3. アテネ；最も有名な共和国で、賢者ソロンの法によって治められていた。
4. ラケダイモン；常にアテネと優位を争っていた。

5. テーベ；有名なギリシア人英雄ヘラクレスの生地。
6. ミューケーネ；トロヤを破壊した有名な国王アガメムノンの居住地。

※（メッセニア、コリントス、テッサリア、クレタ、サモス）

12. マケドニア；ついに他の全てを服従させた。

#### IV. この分裂時代のギリシアでは何が起こったか？

1. アルゴナウテースの遠征。
2. トロヤの破壊。
3. オリンピック。
4. ペルシアとの戦争。
5. 内乱。

#### V. アルゴナウテース遠征の事情はどのようなものだったか？

黒海奥のホルキスの地のある神殿に一枚の金の雄羊の皮があり、それを炎を吐く竜が守っていた。この金羊皮をギリシアの英雄イアソンが奪取し、竜も退治した。その遠征の船がアルゴと名付けられていたので、隊員全体がアルゴナウテースと呼ばれたのである。ヨーロッパでは金羊皮騎士団が今日も栄えている。

#### VI. トロヤでは何が起きたか？

トロヤの王子パリスは美女ヘレンをギリシアから誘拐してきたが、これに復讐するためギリシア人はトロヤに遠征した。10年間にわたりトロヤを包囲したが、まだ陥落させられなかった。そこで巨大な木馬を作らせてその中に兵士を隠した。トロヤ人はこの巨大な木馬をトロヤの町に引き入れたいと考え、それを城壁の内側に引き込んだ。そうこうしているうちにギリシア人が引き返して来、また兵士も木馬から這い出してきたのに、トロヤ人は酔っぱらっていた。こうしてトロヤは炎上し、破壊された。これはイエス誕生前1100年以上も前に起こったことである。

#### ※VII.（オリンピックについて）

#### VIII. ギリシア人がペルシア戦争に際し何を行ったか？

ペルシア帝国はその権力をヨーロッパにも及ぼそうとしてダリウス・ヒュスタスベスと、彼の後継者クセルクセスI世が数え切れぬほどの軍隊を率いて来寇した。しかし彼等は屈辱と恥辱を受けつつ撃退された。この戦争では勇敢な将軍たち、ミルチャデス、キモン、テミストクレス、パウサニウス等がその勇気を示した。

#### IX. ギリシアでは内乱中どんなことが起こったか？

ペルシア戦争後ギリシアの諸共和国間にもたらされたのは統一ではなく、相互を破壊し合う内乱だった。彼等が相互に消耗させあった後に、マケドニア王フィリップが台頭し彼ら全てを彼に従属させた。ペルシア帝国が滅びる直前のことであった。

### 第2章。帝国建設後のギリシア人について



X. どのようにしてギリシア帝国が建設されたか？

マケドニア王フィリップは全ギリシアを服属させた後、ペルシア攻撃を決定した。しかし彼は遠征軍の召集中に暗殺されてしまった。

フィリップが始めたことを遂行したのが彼の息子アレクサンドロス大王だった。かれは最後の皇帝ダリウス・コドマヌスに3度の戦争で相次いで勝利し、その3度目の戦争でダリウスが死んだ。キリスト誕生前330年のことであった。

XI. ギリシア帝国初代皇帝は誰か？

アレクサンドロス大王である。かれはペルシアを征服しただけでなく、さらにインドにいたるまで遠征し勝利を収めた。しかしバビロンへの帰途毒を盛られ、帝国建設後7年目に死んだ。

※XII. (アレクサンドロス大王死後、4王国に分裂。)

XIII. 4王国とは何か？

1. マケドニア
2. アジア
3. シリア
4. エジプト

※XIV～XVI. (マケドニア王国、アジアの王国、シリア王国)

XVII. エジプト王国に関して重要なことは何か？

1. 王国に属したのは今日なおエジプトと呼ばれている地域である。
2. エジプト人はすでに久しい以前からファラオと呼ばれる国王によって統治されていたが、これについては疑問な点が多い。
3. エジプト最初のギリシア人国王はプトレマイオス・レグスで、彼の後継者は皆プトレマイオスを名乗った。
4. 最後の国王となったのは有名なクレオパトラ女王だった。彼女はアウグストゥス帝に征服されたのだが、凱旋式のためにローマに連行されることを嫌い、獄中で蛇を乳房に噛ませて自殺した。彼女の夫アントニウスもまた自殺した。
5. このことが起こったのは紀元3920年、キリスト誕生前30年、王国を293年間にわたり12名の国王が統治したのちのことであった。
6. これによってギリシア帝国は終局し、エジプトはローマの属州となった。

第五巻. ローマ帝国の歴史

序.

I. ローマ史の最もよい区分はどのようなものか？—4部に編制構成するのがよい。

第1部. ローマ建設から帝国の開始まで。

第2部. 帝国の開始から帝国の分裂まで。

第3部. オリエントの帝国。

第4部. 西洋の帝国

第一部. 帝国以前のローマ

II. 第1部の時代にはどんなことがあったか？

1295年間にわたる時代、その間、一部は国王が、他は市長(Bürgermeister)が統治したので、次の2期に分けることができる：

1. ローマ王政時代；816年間。
2. ローマ市長時代；479年間。

第一章. ローマ王政時代

III. ローマ諸王に関して重要なことは何か？

合計28名の王がいたが、一部は都市ローマの建設以前、他は建設以後に活動した。

IV. 都市ローマ建設以前に関して重要なことは何か？

1. ヤヌスがイタリア最初の王となったと伝えられている。イスラエルの士師の時代にあたる。
2. アエネアスがトロヤ破壊の後イタリアに来た。
3. ヌミトルと彼の弟。
4. アムーリウスが都市ローマの建設の契機となった。

V. ローマはどのようにして建設されたか？

国王ヌミトルには一人娘レア・シルウィアがいた。しかし王の弟アムーリウスが兄の生存中に王位から追放し、レアを異教の僧院に閉じ込めた。ところがこのレアが一人の兵士によって妊娠し、双子の息子達、ロムルスとレムスを産んだ。アムーリウスは彼等をティベル川に流させたが、彼等は岸辺に流れ着いて雌狼に乳を与えられ、次いで一人の牧夫に育てられた。双子の兄弟はその後アムーリウスを討って祖父のヌミトルを再び王位に就けた後、ティベル川の岸辺に都市ローマを建設した。この建設はキリスト誕生前750年、従ってバビロン捕囚の150年前に行われた。ローマ人は以後この都市ローマ建設を彼等の年号の紀元とした。

VI. ローマ建設以後の諸王に関して重要なことは何か？

1. ロムルスが都市の建設者である。彼はサヴィニ人から娘達を奪い、また弟レムスを殺した。
2. ヌマ・ポンピリウスがローマの宗教を整えた。
3. ルキウス・タルキニウスがローマ最後の国王となった。

VII. どのようにしてローマで王政が廃止されたか？

ローマにルクレティアという高潔な婦人がいたが、これに最後の国王の息子セクストス・タルキニウスが横恋慕し、夫の留守の間に彼女の家で暴力によって彼女を犯して妊娠させた。ローマの公正を愛する多くの人々がこれに怒り、王家に反対する同盟を結んで父子ともにローマから追放した。そして王政の代わりに市長統治の制度を導入したのである。

第2章. ローマの市長時代

Ⅷ. 市長時代にどんなことが起きたか？

最も重要なのはポエニ戦争である。……市長時代の諸戦争は次の3期のいずれかに区分できる：

1. ポエニ戦争以前
2. ポエニ戦争中
3. ポエニ戦争以後

Ⅸ. ポエニ戦争以前にはどんなことがあったか？

ローマ人はイタリアの大部分を支配下に置いていった。……エトルスキ人、ウェント人、ガリア人、ラテン人、サムニテス人、タレントム人……に勝利した。

Ⅹ. ポエニ戦争ではどんなことがあったか？

ローマとカルタゴは118年間にわたって戦い、この間2度の講和を行っている。従ってポエニ戦争は3度戦われたわけである。……

Ⅺ. ポエニ戦争の間にどんなことがあったか？ —※（北イタリア、全ギリシア征服）

Ⅻ. ポエニ戦争以後どんなことがあったか？

帝政が開始されるまでなお100年間があり、この間にあった重要なことは：

1. 対外戦争
2. 内乱

Ⅼ. ローマはポエニ戦争以後対外的になにを行ったか？

ローマ人はその恐るべき武器を三つの旧世界全てに向けた。従って：

1. ヨーロッパにおける戦争
2. アジアにおける戦争
3. アフリカにおける戦争

Ⅽ. ローマ人はポエニ戦争以後ヨーロッパでなにを行ったか？

ローマ人は最初にスペインを完全に征服し、第2次ポエニ戦争により、ここに属州が形成された。その後、ユリウス・カエサルが当時ガリアと呼ばれ、今日フランスと呼ばれている地域全体を征服した。ユリウス・カエサルはその同時に、当時イングランド人が住んでいたブリタニアも征服し、これに貢納を果たした。最後にドイツもかなりの部分がローマの支配を受け入れなければならなかった。

※ⅩV.（ローマのアジア征服）

Ⅾ. ローマはポエニ戦争以後アフリカでなにを行ったか？

最初彼等はヌミディア国王ユグルダと戦って捕虜にし、獄死させてヌミディアをローマの属州にした。その後、彼等は有名な女王クレオパトラからエジプト王国を奪い、これによって全ギリシア帝国を終焉させた。

Ⅿ. ローマの内乱においては……こんなことがあったか？

始めに元老院（Rath）と民衆（Volck）の間に争いが起きた。

次いで元老院自身が様々な党派に分裂した。

Ⅿ. 元老院と民衆の間にはなにがあったか？

シチリアとイタリアの奴隷が反乱を起こしたが、再び鎮につながれた。次いで若干の不满な人々が民衆のために新たな良い法を定めようとしたが、元老院によって手ひどい扱いを受けた。最後に、呪われた人間であるカティリナがローマを焼こうとしたが、この陰謀はキケロによって暴かれた。

ⅰ. 内乱によってついには元老院はどうなったか？

貴族達自身がついには相互に対立・闘争し、その結果58年間にわたり3度の三頭政治が行われた。

ⅱ. 第1回三頭政治はどのようなものか？

マリウス、キンナ、スラが対立し、ローマが度々略奪され、十万人以上もの人々が殺されるといったことすら起こった。最後に、スラが勝利を占めて終身独裁官となったが、これは事実上は王または皇帝の他ならないものであった。しかし彼はこの地位を自由意志で放棄した。

ⅲ. 第2回三頭政治はどのようなものか？

クラッスス、ポンペイウス、カエサルの三名は最初協力して国土を分割し、クラッススはオリエント、カエサルはガリア、ポンペイウスはイタリアを占めた。しかし協力は長くは続かず、……クラッススがパルティアに敗れ、ポンペイウスがエジプトで首をはねられた後、ついにユリウス・カサルが単独の勝利者となった。

ⅳ. 第3回三頭政治はどのようなものか？

レピドゥス、アントニウス、オクタウィウスが行った。彼等は互いに攻め合ったが、レピドゥスが先ず死に、ついでオクタウィウスがアントニウスを短刀で自殺させ、同時に彼の妻エジプト女王クレオパトラを毒蛇による自殺に追い込んだ。

これは紀元3920年、キリスト誕生前27年のことであった。これによりオクタウィウスはアウグストゥスの称号を獲得し、事実上初代ローマ皇帝となった。

第二部. ローマ帝国の開始から帝国の分裂まで

ⅳ. ローマ帝国は何年間統一を維持したか？

合せて425年間である。ローマ帝国の開始はキリスト誕生直前で、それゆえキリスト紀元で年号を数えるほうが容易なので、皇帝達を以下のように整理する：

1. 1世紀の諸皇帝
2. 2世紀の諸皇帝
3. 3世紀の諸皇帝
4. 4世紀の諸皇帝

ⅳ. 1世紀の諸皇帝はどのように統治したか？

12名で、全員ローマ人皇帝。次の1世紀間では外国人で皇帝となった者もあった。

1. アウグストゥス；初代皇帝。また、全皇帝中最も長



期間の57年間を統治した。彼の時代にキリストが誕生した。

2. ティベリウス；最初は善良だったが、後になると暴君となった。彼の時代に救世主が十字架にかけられた。

3. カリグラ；あらゆる悪徳に耽り、最後は娼業で気が狂った。

4. クラウディウス；ブリタニアを完全に征服。妻に毒草で殺された。

5. ネロ；母親を殺し、ふざけてローマに火を付け、キリスト教徒を残酷に迫害したが、謀反が起きた時、短刀で自殺した。

※（ガルバ、オト、ウィテリウス、ウェスパシアヌス）

10. ティトゥス；イエルサレムを破壊した。

11. ドミティアヌス；キリスト教徒を厳しく迫害。刺し殺された。

12. ネルウァ；1年と少し統治して、老齢のため死。

XXV. 2世紀の諸皇帝はどのように生きたか？

1. トラヤヌス；優れた皇帝。イタリアではなくスペイン産まれ。

2. ハドリアヌス；栄光の地に再び王国を建設しようとしたユダヤ人を全世界に四散させた。

3. アントニヌス・ピウス；ピウス（「敬虔」）という名を行為で示した。

※（アントニヌス・哲学者及びルキウス・ワルス、コンモドゥス……）

XXVI. 3世紀の諸皇帝はどのように統治したか？

少なくとも40名、しかも極めて混乱しているので、年少者や初心者には覚える必要はない。重要な諸皇帝としては；※（セウェルス、カラカラ……）……

6. ディオクレティヌス；キリスト教徒の残酷な迫害で名を永遠にとどめた。

7. 3世紀末期には、一度に四名の皇帝が立つ程の混乱ぶりだった。

XXVII. 4世紀の諸皇帝はどのように統治したか？

合せて11名だが、次の3名が重要：

1. コンスタンティヌス；首都をコンスタンティノープルに遷都した。最初のキリスト教徒の皇帝。

2. ユリアヌス・背教者；世紀中葉に生き、キリスト教に対する冷酷な反対者。

3. テオドシウス；世紀末に生き、395年、帝国を彼の二人の息子に分与した。東部をアルカディウス、西部をホノリウスが獲得した。

### 第三部. オリエントの帝国

※XXVIII. （オリエントの帝国の支配した地域）

XXIX. 帝国はオリエントではどれだけ続いたか？

初めにキリスト教徒皇帝が1000年以上統治した後、

トルコ人が帝国を獲得し今日に至るまで300年間保持している。従って合わせて帝国はおよそ1300年間存続し、その歴史は二つの章に分けることができる。

第1章. オリエントのキリスト教徒諸皇帝

第2章. オリエントのトルコ人諸皇帝

第1章. オリエントのキリスト教徒諸皇帝

XXX. オリエントのキリスト教徒諸皇帝はどのように統治したか？

80名以上の諸皇帝を次の5段階に分けるのが適切である。

第1段階；アルカディウスから5世紀末葉まで。

第2段階；6世紀前半のユスティニアヌス1世から

第3段階；ニケフォロスから9世紀初頭まで。

第4段階；アレクシウス1世から11世紀末葉まで。

第5段階；アンドロニコスII世から13世紀初頭まで。

XXI. 第1段階で重要なことは何か？

ゼノン帝が彼の妃自身の教唆により生きながら埋め殺された。

ユスティヌス帝は若い頃は豚飼だった。

同じ頃蛮族が東帝国を侵し、さらにローマを掠略した。

XXII. 第2段階で重要なことは何か？

この段階のオリエントの帝国が最も繁栄した。

当時オリエントの皇帝は西洋の皇帝でもあり、イタリアに太守を派遣していた。

ユスティニアヌスI世が法典を編纂させた。

フォカス帝が7世紀初頭にローマ教皇を初めて普遍的大司教として承認したが、これは彼が前の皇帝マウリティウスを殺害したことを承認してもらうためだった。

XXIII. 第3段階で重要なことは何か？

西洋ではちょうど800年にカール大帝が帝国を再建した。またその直前に太守が廃止された。

ニケフォロス帝が西洋の皇帝と講和し、両者が互いに皇帝たることを承認しこれまでの全ての権利を放棄した。

XXIV. 第4段階で重要なことは何か？

11世紀末、西洋のキリスト教徒が「約束の地」奪回のためサラセン人に十字軍を派遣し、次々と軍隊をオリエントに遠征させた。……ついに13世紀初頭、フランスのボードワン伯がコンスタンティノープルを征服して皇帝の称号を獲得した。……

XXV. 第5段階で重要なことは何か？

この時代にはトルコ人がアジアに巨大な王国を建設した。

皇帝ヨハネス・パレオロゴスがギリシア人とラテン人の帝国を和合させようと全力を尽くしたが、成功し

なかった。

1453年、コンスタンティヌスXI世の時、トルコ人がコンスタンティノープルを征服し、オリエントのキリスト教帝国が滅んだ。オリエント・キリスト教徒のトルコ人との戦いをよく西欧が援助できなかった原因は、ラテン教会とギリシア教会の間の、即ちローマ教皇とコンスタンティノープル総大司教の間の憎悪にあった。

## 第2章. オリエントのトルコ人諸皇帝

### XXVI. トルコ人の歴史はどのように理解するとよいか？

トルコ人の発生から今日までほとんど1100年が経過している。

トルコ人は最初各地を放浪したが、1303年、小アジアにオスマン君侯国と呼ばれる恒久的王国を建設した。

上の理由から全歴史は新旧2つの時代に区別される：旧時代はオスマン君侯国以前の約700年間。

新時代はオスマン君侯国以後の約400年間である。

#### 〔旧時代のトルコ人の歴史〕

### XXVII. トルコ人の登場以前にどのようなことがあったか？

アラビアにマホメットという不信心な商人がいたが、彼は自分が預言者であると考え、新しい宗教を考案した。それはキリスト教、ユダヤ教に異教をつぎはぎ細工したもので、マホメット教と呼ばれた。この新しい宗教のゆえにマホメットは622年メッカを追われた。この逃避行は、トルコ人によってヘジラと呼ばれて今日なお重視されており、彼らの年号がこれを紀元としているほどである。マホメットはこの逃避行以後は武器を取り、かれの宗教を剣で広めようとした。このようにして著名なトルコ王国成立の基礎が築かれたのである。彼の信奉者達は最初サラセンと呼ばれたが、これは大喧付きのマホメットが、自分はサラの子孫だと言い立てたからである。マホメットの死後およそ100年たって、8世紀にトルコ人がアジア奥地から現われ、サラセンと結合した。以後はこの全集団はトルコ人と呼ばれるようになった。

### XXVIII. トルコ人はどうしてこれほど拡大したのか？

彼等は、最初は、今日のアラビアとシリアというアジアのほんの一部分を占めていたにすぎず、そこでカリフと呼ばれる首領を指導者にいただいていた。神は、その後この無頼の徒が短期間にヨーロッパとアフリカに拡大し、そこに多くのカリフが登場することをお許しになった。神の民が神を無みしたことにその原因の存することは、殆ど疑いのないところである。それゆえ、全オリエントがマホメット教徒の残虐で満ち満ちているのは、神の定めたもうたところなのである。

### XXIX. しかしキリスト教徒はトルコ人またはサラセンに抵抗しなかったのか？

当初この盗賊のような人々がこれ程偉大なものとな

るとは誰も考えなかった。しかし、コンスタンティノープルの皇帝がこのキリスト教徒の敵に耐えられなくなったのを見て、初めて西洋キリスト教徒がサラセンに対する遠征を行った。これが十字軍なのである。

### XL. この聖なる戦争でなにがあったか？

戦争は1096年に始まり殆ど200年間にわたった。この間、5回の大きな遠征が行われて何百万ものキリスト教徒がかの地に向かった。ローマ教皇はまずヨーロッパの君主達を戦いに勧誘し、この聖戦で犯す罪全てに許しを与えた。この聖戦の目的は、約束の地とそこにある聖なる墓をサラセンの手から取り戻すことにあった。最初のキリスト教徒指揮官はゴドフロワ・ド・ブイヨンで、彼は1099年イエルサレムで国王に選ばれた。

### XL I. この聖戦によって何が遂行されたのか？

何百万という人々が死地に追いやられたということ以外に何も無い。というのは結局はイエルサレムが再度サラセンの手に落ちただけでなく、彼等が逆にオリエントの帝国を征服してしまったからである。

#### 〔新時代のトルコ人の歴史〕

### XL II. 新しいトルコ人の歴史が開始するのはいつか？

1303年からである。なぜならこの年、オスマンが小アジアにその後他の全ての諸国を足下におくことになる新しい侯国を建設し、建設者を記念してオスマン君侯国と呼ばれるようになるからである。

この時からトルコの君主はもはやカリフと呼ばれずスルタンと呼ばれた。

### XL III. この新時代の歴史をどう区分するのが最適か？

最大の指標は1453年である。この年、トルコ人はコンスタンティノープルを征服し、オリエントの帝国を滅ぼしたのである。これにより、スルタンをこの征服以前と以後とに区別することができる。

### XL IV. コンスタンティノープル征服以前には誰が統治したか？

オスマン；オスマン君侯国を建設した。王宮はブルサに置かれた。

アムラト I 世；有名なイエニチェリをキリスト教徒の子供たちで組織した。

バヤジット I 世；タタールの暴君タメルランの捕虜になって鉄格子の中に閉じ込められ、その中で首を切られた。

アムラト II 世；1444年、ヴァルナでキリスト教徒に大勝利を収めた。

メフメト II 世；1453年、コンスタンティノープルを征服し、第1代のトルコ人皇帝となった。

### XL V. その後どんなトルコ人皇帝が統治したか？

1. セリム I 世；1517年、ルターが宗教改革を始めた年にエジプトを獲得した。

2. スレイマン；ロードス島を征服し、ロードスの騎士



達をマルタに駆逐した。さらに、ハンガリーへの鍵であるギリシアのヴァイセンブルグと、ハンガリーの首都オーフェンを征服した。しかし、1529年、ウィーンの攻囲には失敗した。この皇帝がトルコ人皇帝の中で最強の皇帝だということは間違いない。

3. セリムⅡ世；1570年、従来ヴェネツィアが所有していたキュプロスを奪取。
4. アフメトⅠ世；1606年、キリスト教徒と講和。この時以後は、キリスト教皇帝とトルコ人皇帝は相互に兄弟と呼ぶことが取り決められた。
5. イブラヒム；1648年、イエニチェリに絞殺された。
6. メフメトⅣ世；1664年キリスト教徒と20年間の和平条約を締結した。1683年カンディア王国をヴェネツィアから奪い、1683年には条約を敗ってウィーンを攻囲したが、これは失敗した。
7. ムスタファ；現在のトルコ皇帝、キリスト教徒との戦争を1699年カルロヴィッツの講和で終結させた。

#### 第四部. 西洋の帝国について

##### XLVI. 本章はどのように区分されるか？

- 第1章：カール大帝以前の西洋の帝国、405年間の歴史
- 第2章：カール大帝以後の西洋の帝国、902年間の歴史

##### 第1章. カール大帝以前の西洋の帝国

##### XLVII. 本章で重要な内容は何か？

1. ローマ諸皇帝
2. 東ゴート諸王
3. ラヴェンナ太守
4. ランゴバルドの諸王
5. ローマ教皇達

##### XLVIII. ローマ諸皇帝に関して記憶すべきことは何か？

……テオドシウス帝がローマ帝国を二分したとき、第のホノリウスが西洋の帝国を相続した。西洋の帝国はイタリア、スペイン、ガリア、イングランド、ドイツ、ハンガリー、アフリカを含んでいた。しかし、オリエンの帝国がサラセンによって襲撃されたと同じように、西洋の帝国は全く野蛮な諸民族によって荒らされ、破壊された。ホノリオスの時代に西ゴートが侵入し、ついにはスペイン王国を手に入れた。ヴァレンティニアヌスⅢ世時代、アフリカがヴァンダル人により、ガリアがフランク人により、ブリタニアがサクソン人によってローマ帝国から分離された。とりわけ脅威となったのはアッティラ王の率いるフン族の侵入であった。ロムルス・アウグストゥルス時代には……イタリア自身が東ゴートにより蹂躪され、こうして西洋の帝国は一時消滅した。

年号の記憶は簡単である。この蛮族の移動全ては5世紀に起き、西洋の帝国の滅亡は476年であった。最

初のローマ皇帝はアウグストゥスといい、最後のローマ皇帝はアウグストゥルスという名であった。

##### XLIX. 東ゴートに関して記憶すべきことは何か？

……東ゴート最初の王はテオドリックで、王宮はヴェローナに置いた。ゴート王国は、しかし60年以上は存続せず、ギリシア人に再び滅ぼされた。最後のゴート王はテヤスという名であった。

##### L. 太守に関して記憶すべきことは何か？

西帝国がアウグストゥルスをもって滅んだので、東帝国皇帝ユスティニアヌスⅠ世はこれを継承しようと考へ、ナルセス将軍にイタリアの大部分を奪還させた。ランゴバルドがその後北イタリアを占拠したとはいえ、中・南部は大部分コンスタンティノブルの皇帝に従った。コンスタンティノブル皇帝が派遣した副王は、……太守と呼ばれた。彼の居所はラヴェンナで、太守制は185年間維持された。最初の太守はユスティヌス帝が派遣したロンギヌス、最後はエウティキウス。これらの太守領は752年ランゴバルド王がついにその支配下に置いたが、そのおよそ20年後、フランクによって再び破壊を被った。

##### LI. ランゴバルドに関して記憶すべきことは何か？

……ランゴバルド王国は206年間イタリアに存続した。これを滅ぼしたのはフランク王カール大帝である。最後の王はデシデリウスといい、773年に捕らわれた。

##### LII. ローマ教皇に関して記憶すべきことは何か？

キリスト教発生後間もなくローマのキリスト教徒が一人の司教を選出している。しかし、ローマ皇帝が異教徒でローマに居住していた時代には、ローマ司教またはローマ教皇について多くを語るができない。その後、コンスタンティヌス大帝がキリスト教徒になり、さらに首都をコンスタンティノブルに移した時、ローマ教皇の地位が上昇しはじめた。帝国分裂直後、最初は皇帝、次いで東ゴート族、ランゴバルド族、太守がイタリアを統治した。しかし、とりわけ太守は、ローマを首都とはしなかった。やがて、……フランク王がランゴバルド王国を、ローマ教皇が太守領を手にいれた。これは8世紀のできごとである。

##### 第2章. カール大帝以前の西洋の帝国

##### LIII. 西洋の帝国はどのようにして再建されたか？

フランク王カール大帝はローマ教皇をランゴバルド王から解放しただけでなく、彼にイタリアの麗しい地域も与えた。今度はローマ教皇が返礼をする番で、カール大帝が800年にローマに来た時、民衆を教唆してクリスマス・イブの日に、このカール大帝をローマ皇帝と宣言したのである。

##### LIV. 以後の諸皇帝をどう記憶するのがもっともよいか？

1250年にローマ帝国に大空位時代が始まって、23

年間続いたことを記憶すればよい。そしてそれを基準に事件を記憶していけばよい：

1. 大空位時代以前。
2. 大空位時代中。
3. 大空位時代以後。

LV. 大空位時代以前にはどのような皇帝がいたか？

1. カロリング朝の諸皇帝
2. ザクセン朝の諸皇帝
3. フランケン朝の諸皇帝
4. シュヴァーベン朝の諸皇帝

LVI. カロリング朝の諸皇帝に関して記憶すべきことは何か？

カロリング朝という呼称は初代のカール大帝に由来する。

このカール大帝はイタリア、ドイツ、フランスを同時に所有した。

しかし彼の息子のルイ敬虔王が王国を彼の3人の子供たちに分割して与えた：

1. ロタールはイタリア、及びドイツとフランスの境界地域の一部を獲得した。
2. ルートヴィヒはドイツを、
3. シャルル禿頭王はフランスを獲得した。

皇帝位は最初イタリア、次いでフランス、最後にドイツの王家に継承された。

912年カロリング家の最後の皇帝ルートヴィヒV世が死んだので、ドイツ人は生粋のドイツ人、フランケン太公コンラートI世をローマ皇帝に選挙した。

この時以後皇帝位は常にドイツ人に継承され、国名はやがて「ドイツ民族の神聖ローマ帝国」と呼ばれるようになった。

※LVII. (ザクセン朝の諸皇帝)

LVIII. フランケン朝の諸皇帝に関して記憶すべきことは何か？

※(コンラートII世、ハインリッヒIII世)

ハインリッヒIV世；教皇グレゴリウスVII世またはヒルデブラントに何度も破門され、赦免を得るために冬に3日間も素足のまま教皇の城の前に立ち尽くさねばならなかったほどである。もっとも彼は対立皇帝をすべて打ち破っている。彼は、また、聖戦が始まった時の皇帝でもある。彼自身の息子のハインリッヒV世が彼から皇帝位を奪い、しかも父が破門中に死んだというので遺体を埋葬もせず放置した。

ハインリッヒV世；1122年、教皇に対する対応を最終的に固め、ヴォルムス国会でローマ帝国内での司教叙任権を教皇に譲った。これによって帝国はそのいわば右腕を失った。……

LIX. シュヴァーベン朝の諸皇帝に関して記憶すべきことは何か？

コンラートIII世；聖戦時代に約束の地にまで遠征したドイツ人最初の皇帝。また彼の時代に皇帝と教皇との争いが激しくなり、イタリアとドイツの全土が2つの党派に分かれてしまった。教皇派はゲルフ、皇帝派はギベリニと呼ばれ、この分裂は100年以上にも及んだ。

フリードリヒI世・バルバロッサ；教皇と激しく戦ったが、ヴェネツィアで教皇アレクサンデルIII世に敗れた。この時教皇は皇帝に対し次のように語りかけたという；「汝は獅子とマムシを乗り越えて進むであろうが、また新たな獅子と竜に遭遇するであろう。」この皇帝も約束の地への遠征を行ったが、ある河で溺れ死んだ。

※(ハインリッヒVI世、フリードリッヒII世) …

※LX. (大空位時代)

LXI. 大空位時代以後、皇帝となって統治した者は誰か？

- I. 選定候達は、最初のかんりの期間、次々と家柄をかえて皇帝を選出した。
- II. その後は、常に選定候達はオーストリア家から皇帝を選んだ。

※LXII. (様々な家柄出身の諸皇帝)

※LXIII. (オーストリア家出身の諸皇帝)

※LXIV~LXVI. (アルブレヒトII世、フリードリッヒIII世、マクシミリアンI世)

LXVII. カールV世に関して記憶すべきことは何か？

大部分が宗教問題に費やされた。1517年ルターが初めて贖宥状に反対した。1521年ウォルムスで国会が開催され、ルターに追放刑が言い渡された。1524年トマス・ミュンツァーが農民戦争を扇動した。1529年にはプロテスタントという呼称が成立した。1530年、アウグスブルグ信仰告白が定められ、同時にシュマルカルデン同盟が締結された。1533年、ウェストファリアで再洗礼派が反乱を起こした。1546年、ルターがアイスレーベンで死に、翌1547年、シュマルカルデン戦争が開始されてカールV世がザクセン選定候ヨハン・フリードリヒをミュールベルクで捕虜とした。1548年「暫定措置」が公布され、1552年バッサウ条約、1555年には宗教和議がアウグスブルクで結ばれた。

1556年にカールV世が退位した時、巨大なオーストリア家の権力が分割されたが、これは今日なお再統一されていない。弟のフェルディナンドがオーストリア世襲領及び皇帝位を獲得した。他方、息子のフィリップII世がスペイン、ネーデルランド、ブルグンド、ミラノ、ナポリ、シチリア、サルディニアとアメリカを獲得して分家スペイン家を興した。

※LXVIII~LXXXIII. (フェルディナンドI世~フェルディナンドIII世)

※LXXXIV~LXXXI. (三十年戦争)



LXXII. レオポルト I 世の時どんなことがあったか？

この皇帝は4つの大戦争を遂行した。2つはトルコと、他の2つはフランス王との戦争であった。

※LXXIII~LXXIV. (第1次、第2次トルコ戦争、1660~64, 1670~1669)

LXXV. 第1次フランス戦争については何を記憶すべきか？

1667年フランス王がスペイン領ネーデルランドを奪取しようとしたが、オランダによって1668年アーヘンの講和を余儀なくされた。この直後イギリス、スウェーデン、オランダによって三国同盟が締結された。

1672年フランスがオランダに侵入した。皇帝を始めイギリス王、スペイン王、スウェーデン王大部分のドイツ諸侯がこの戦争に巻き込まれた。

1679年ようやくナイメーヘンで全般的講和が成った。

LXXVI. 第2次フランス戦争ではどんなことがあったか？

1681年、フランス王はシュトラースブルク、1684年ルクセンブルクに侵入した。しかし……1684年、レーゲンスブルクの20年間の講和で問題が調停された。

この間、フランス王は、新たにプファルツとケルンの事件に、イギリス王を味方として介入した。これに対し1686年、皇帝、スペイン、オランダ、大部分のドイツ諸侯が同盟を結ぶに至った。この結果、1688年、戦争が勃発し、ネーデルランド、ライン河、スペイン、イタリア、アイルランド、海上で同時に戦闘が行われた。

1697年、再度全般的講和がライプツイクで締結された。

## 資料 2；エッスィヒ、『世界史序説』(1728)

EBich, J. Johann George, Kurze Einleitung zur allgemeinen weltlichen Historie, neben einer Zeit = Rechnung und Erd = Beschreibung. Zum Gebrauch des Hochfürst . Württembergischen GYMNASII in Stuttgart, Stuttgart 1728.

<目次>

序論.

I. 普遍史

第1分冊、神の民、特にその世俗的統治について

第1章、天地創造から大洪水まで

第2章、大洪水から出エジプトまで

第3章、出エジプトから王国形成まで

第4章、王国の成立からバビロン捕囚まで

第5章、バビロン捕囚からイエルサレム破壊まで

第2分冊、アッシリア帝国

第1章、分裂以前のアッシリア帝国

第2章、分裂以後のアッシリア帝国

第3分冊、ペルシア帝国

第4分冊、ギリシア帝国

第1章、帝国以前のギリシア

第2章、帝国樹立以後のギリシア

第5分冊、ローマ帝国

第1部、帝国以前のローマ

第1章、ローマ諸王

第2章、ローマ市長 (Bürgermeister)

第2部、ローマ帝国成立から帝国分裂まで

第3部、分裂後のオリエントの帝国

第1章、オリエントのキリスト教徒諸皇帝

第1章、オリエントのトルコ人諸皇帝

第1節、オスマン朝以前の旧時代

第1節、オスマン朝以後の新時代

第4部、分裂以後の西洋の帝国

第1章、カール大帝以前の帝国

第2章、カール大帝以後の帝国

第1節、大空位時代以前；カロリング朝、

ザクセン朝、

フランケン朝、

シュヴァーベン朝

第2節、大空位時代

第3節、大空位時代以後

1. 様々な家柄の諸皇帝

2. オーストリア家の諸皇帝

II. 特殊史

第2分冊、ドイツ

第1章、オーストリア太公

第2章、バイエルン公とプファルツ宮中伯

第3分冊、スペイン

第13分冊、イタリア

○序論 (S.1~3)

I. 歴史とは、世界の始まりから我々の時代までに起こった最も重要な出来事に関する学問である。

II. 天地創造から我々の生きている1728年まで、5677年間が経過した。

III. この期間中で、次の出来事以上に重要なものはない；

1. 大洪水、

2. キリスト生誕。

IV. 従って世界史の全行程は次の三期に区分される；

1. 天地創造から大洪水まで、1657年間、

2. 大洪水から世界年代3949年にあたるキリスト生誕まで、2293年間、

3. キリスト生誕から現在まで、1728年間。

V. 天地創造以後に生じた出来事を、次の分野に区分することができる；

1. 世俗の統治の分野
  2. 神の教会の分野,
  3. 学者たちの分野,
  4. 自然の分野,
  5. 技芸の分野,
  6. 生活の分野
- VI. 従って六種類の歴史が存在することになる ;
1. 政治史は世俗の統治に関する全てを、統治者から戦争、講和の締結、同盟、国家の成立、発展、衰退と滅亡に至るまでを扱う。
  2. 教会史は神の教会の状況について、即ちあらゆる宗教、異端、宗教会議決議、修行、迫害について記述する。
  3. 學術史は学者達について記述する。學術がどのようにして、あるときはこの国で、あるときはかの国で繁栄したのか、どのようにして各々の學問が開始されたり、盛んになったり、また衰えるのか、各々の分野で最良の著述家は誰かなどについて記述する。
  4. 自然史は自然の奇跡について記述する。即ち、天空や四大、人間、獸、植物の世界で、どのような奇跡的出来事があったかについて記述する。
  5. 技芸史は全ての技芸と技術者、藝術家に関する情報を、即ち、優れた画家、銅版画家、建築家、技術者、手品士その他について記述する。
  6. 生活史は庶民生活の世界で起きた注目すべき事件や、礼を弁えた人々が交際の中で、または一人で楽しんだりした事柄全てを含む。
- VII. 最初に学ぶべきは政治史である。というのは、政治史めきでは誰も他のどの分野も修めることができないのであるから。
- VIII. 世界に存在する政治的支配の数と同じ数の政治史が存在する。しかし、この特殊史は、それ以前に普遍史を学んでいなければ理解できないものである。この普遍史は特殊史に基礎を与えるもので、それゆえ基礎的歴史と呼ばれる。
- IX. この基礎的歴史に最初の5分冊が当てられており、次の内容を扱っている ;
- I. 神の民,
  - II. アッシリア帝国
  - III. ペルシア帝国
  - IV. ギリシア帝国
  - V. ローマ帝国

資料 3 : ヘレフォード, 『世界図』  
(ca. 1300)

